

福島) 戊辰戦争から150年 相互理解の時代へ

奥村輝、池田拓哉 石塚広志

2018年1月1日03時00分 (朝日新聞)

1868年、徳川の世を終わらせた新政府軍(西軍)は、幕府を支えてきた会津に向けて進軍し、県内各地で激戦が繰り広げられた。その戊辰戦争から今年で150年。戦火を交えた双方で、相手の思いを理解しようという試みが始まっている。一方、敗れた旧会津藩士が入植した北海道では足跡の風化が進む。1世紀半の時間は歴史のページを着実に進めている。

「家訓(かきん)は会津藩士の心のよりどころになったものだね」「その重要性が伝わるように展示しないと」

西軍・土佐藩の城下町、高知市にある県立高知城歴史博物館で、3月からの特別展「明治元年の日本と土佐 戊辰戦争それぞれの信義」の準備が進められている。会津藩初代藩主・保科正之が徳川家への忠誠を定めた家訓や、奥羽越列藩同盟の盟約書の写し、会津藩降伏の式典で敷かれた「泣血氈(きゅうけつせん)」も福島県内から運ばれ、展示される。

学芸員の高木翔太さん(30)は「大切な物をよく貸していただいた。本当に感謝している」と話す。

館長の渡部淳さん(55)によると、高知県で旧幕府側の史料がこれだけまとまって展示されるのは初めてではないかという。「相手も含めた全国的な視点がないと、何が起きて、どういう日本がつけられたのか見えてこない」

高知県は鹿児島、山口、佐賀の各県とともに「平成の薩長土肥連合」を結成し、観光キャンペーンを展開している。その中で、高知県内の博物館など歴史関連施設は「連絡協議会」を結成。それぞれの施設が「幕府側の立場にも注目しなければならない」といった意識で企画を練っているという。

県立坂本龍馬記念館(高知市)は7月から戊辰戦争の特別展を開催する。7月28日には会津藩士の埋葬に関する新史料を発表した元会津図書館長の野口信一さん(68)の講演会を開く。

主任学芸員の亀尾美香さん(45)は「土佐など西国では離れていることもあり、戊辰戦争を含め、福島のことを知らない人が多い」と話す。「空気感や体温のようなものを知るには、実際に会って話を聞くのが一番。会津の人たちがどのように考えているのか、わかり合いたいです」

渡部さんはこう語る。「100年では無理だった。150年でやっと協力できる機運が出てきたのだと思う。当時の立場の違いを越え、改めて近代日本を考える契機になる展示にしたい」



「明治維新150年」ののぼり旗が川沿いに並び、風に揺れる。鹿児島市中心部の遊歩道「維新ふるさとの道」。

西郷隆盛を描く今年のNHK大河ドラマ「西郷(せご)どん」で、時代考証を務める鹿児島県立図書館長の原口泉さん(70)が一目置く会津藩士がいる。

戊辰戦争で新政府軍を迎え撃った佐川官兵衛だ。剣術に優れ、薩長に「鬼の官兵衛」と恐れられた。佐川は警察官になり、西南戦争では政府軍を指揮して、西郷率いる薩摩軍と対決、銃弾に倒れた。

原口さんは「人望が厚く、『道義』を大切にした。150年を機に、佐川の生き様にもスポットが当たってほしい」と話す。(奥村輝、池田拓哉)

宗像精館長に聞く 会津藩校日新館

会津から北へ約640キロに位置する北海道余市町。川沿いのニッカウキスキー余市蒸留所の対岸にある果樹園に、樹齢100年を超す「緋(ひ)の衣」というリンゴの木が1本だけ残っていた。農園の4代目、吉田浩一さん(56)は「今シーズンも立派な実をつけた。他の木と比べても王者の風格がある」と話す。

戊辰戦争後、北海道に渡った旧会津藩士のうち約200人が1871年に余市に入植した。森林を切り開き、8年後にリンゴ栽培に成功。「緋の衣」と名付けた。町の資料によると、京都守護職の松平容保に孝明天皇が与えた衣の色にちなんで命名されたという。

「緋の衣」は名産品になり、後にニッカを創立した竹鶴政孝は、この実をしぼったジュースを販売し、ウイスキー工場の資金に充てた。嶋保・余市町長は「余市の成り立ちはニンシとリンゴ。リンゴがなければニッカもなかった」と話す。しかし、品種改良が進む中で、「緋の衣」は減っていった。

リンゴとともに、旧会津藩士の子孫も4~5代目となり、記憶の風化が進みつつある。

余市町福島県人会会長の水野隆志さん(68)によると、1984年の松平勇雄・福島県知事(容保の孫)の訪問を機に発足した県人会は当時60人を数えたが、現在は14人だ。

水野さんは「3代目ごろまでは苦労話を直接聞くこともできた。会津弁や風習も受け継がれていたが、次第に郷土愛が失われつつある」と危機感を募らせる。(石塚広志)

【近現代(明治時代~)】戊辰(ぼしん)戦争の原因は何か

戊辰戦争は、何が原因で起こったのですか。

戊辰戦争が起こった原因は、大政奉還(たいせいほうかん)の後に権力を奪われた旧幕府軍の、新政府に対する反発です。

幕府側は、朝廷を中心とする新政権に徳川家も参加することを前提として大政奉還を行いました。

しかし大政奉還の後、新政府は王政復古(おうせいふっこ)の号令を発し、天皇中心の政治に戻すことを宣言しました。そして旧幕府(徳川家)の影響力を排除しようとして、徳川慶喜(とくがわよしのぶ)に対して役職を辞任することを命じ、領地も返上するよう求めました。

これに対して強く反発した旧幕府軍が京都近くの鳥羽・伏見で新政府軍と武力衝突して、戊辰戦争が始まりました。

新政府軍は鳥羽・伏見の戦いに勝利し、続いて江戸に攻め進みました。そして江戸を占領し、さらに東北地方へと攻め進み、最後は北海道の函館(はこだて)での戦いに勝利して、旧幕府軍を降伏させました。

**めいじいしん【明治維新】

日本を近代国家にするため、明治時代の初めに行われた一連の諸改革。

【あいつぐ改革】1867年、大政奉還で江戸幕府がたおれると、王政復古の大号令が出され、翌1868年、五箇条の御誓文によって新しい政治の方針が示された。明治新政府は、版籍奉還や廃藩置県によって、天皇を中心とする中央集権国家のしくみをととのえ、四民平等の政策で古い身分制度を廃止した。また、富国強兵・殖産興業の政策によって、近代的な軍隊を誕生させるとともに、近代産業の育成をはかり、地租改正によって財政の基礎を確立した。

【近代国家の出発点】こうした政府の一方的な改革に対して反発がおり、農民一揆や士族の反乱などがあいつぐが、1877(明治10)年の西南戦争の平定で、明治維新はいちおう完成された。封建制度がくずれ、資本主義発展の基礎がきざかれ、文明開化の動きが高まる中で、明治維新は近代日本への出発点となった。→明治時代

コーチ 明治維新は、1864年ごろの倒幕運動から1871年の廃藩置県ごろまでの期間だとする説もある。

のうみんいっき【農民一揆】

明治めいじ前期の農民のうみん運動。江戸えど時代の百姓一揆ひやくしょういっきを引きついだもの。まずしい農民のうみんたちにとって、明治めいじ新政府せいふの政策せいさくは、期待したものほど遠く、地租改正ちそかいせい反対、小作権けんの保障ほしょう、徴兵令ちようへいれい反対などを要求ようきゅうして一揆いっきをおこした。

*ひやくしょういっき【百姓一揆】

江戸えど時代の百姓ひやくしょうの反抗はんこう運動。重い年貢ねんぐ、村役人の不正ふせい、専売制せんばいせいの実施じつしなどがおもな原因げんいんで、とくに中期ごろから激化げきかした。初期しょきには村の名主なぬしたちが領主りょうしゅに直訴じきそする形が多かったが、中期ごろから農民のうみんが大規模きぼに立ちあがって反抗はんこうするようになり、末期まつきにはまずしい農民のうみんたちが領主りょうしゅのほか、村役人や地主まで攻撃こうげきするようになった

百姓一揆ひやくしょういっきは18世紀せいき前半の享保きょうほうの改革かいかくのころから増加ぞうかし、天明てんめい・天保てんぼう年間に急増きゅうぞうしている。これは、ききんなどが大きな要因よういんになっている。

【明治時代】

1868(明治1)年の明治政府成立より1912(明治45)年7月30日の明治天皇死去までの時代。▶江戸幕府を中心とする封建的支配が終わり、近代的統一国家から世界の列強にくわわった時代。西南戦争までの時期は統一国家誕生時期で、新政権成立と欧米先進国の文化の直輸入による諸制度の改革と文明開化の欧風化が見られ、反政府運動・農民一揆もしばしばおこった。憲法制定・国会開設までの時期は自由民権運動*から絶対主義政権の確立期で、経済的には資本主義が発達し産業革命を迎えた。後期は日清戦争・日露戦争により、軍部とむすんだ重工業の発展と資本主義の発達が見られ、国家主義的傾向を強めた反面、労働問題・社会主義運動がおこった。対外的には条約改正を達成し、列強の一員にくわわった。

**じゆうみんけんうんどう【自由民権運動】

明治めいじ時代の前期に、国会の開設かいせつや憲法けんぽうの制定せいいていなどを政府せいふにもとめた国民こくみん運動。

〔運動のおこり〕

(1) 背景はいけい…薩長さつちよう出身者による藩閥政治はんぱつせいじに対して批判ひはんが高まり、福沢諭吉ふくざわゆきちらが紹介しょうかいした西洋の自由思想が、人々の間に広まっていた。

(2) おこり…板垣退助いたがきたいすけ*・後藤象二郎ごとうしょうじろうらが、1874(明治めいじ7)年に民撰議院設立建白書みんせんぎいんせつりつけんぱくしょを提出ていしゅつし、これが自由民権みんけん運動の口火となった。

(3) 広がり…板垣退助いたがきたいすけらは土佐とさ(高知こうち県)で立志りっし社を結成けっせいし、1875(明治めいじ8)年には全国的ぜんこくてきな組織そしきをもつ愛国あいこく社を大阪おおさかで結成けっせいした。はじめは不平ふへい士族しぞくが中心であったが、やがて商工業者・地主・知識ちしき人らが参加さんかするようになり、各地かくちに政治せいじ団体だんたいが生まれて、地租ちその軽減けいげん・条約改正じょうやくかいせい・地方自治じちなどの要求ようきゅうもかかげるようになった。1880(明治めいじ13)年、愛国あいこく社は国会期成同盟きせいどうめいとあらためられ、運動はさらに発展はってんした。政府せいふは言論げんろん・出版しゅっぱん・集会などをきびしくとりしまって弾圧だんあつした。

〔発展はってんと衰退すいたい〕

(1) 政党せいとうの結成けっせい…自由民権みんけん運動が高まり、北海道ほっかいどう開拓使官有物払下事件かいたくしかんゆうぶつはらいさげじけんで政府せいふへの批判ひはんがはげしくなると、政

府せいふは 1881（明治めいじ 14）年に国会開設かいせつの詔みことので、10 年後の国会開設かいせつを約束やくそくした。自由民権派みんけんはの人々は国会開設かいせつにそなえて、板垣退助いたがきたいすけは自由党とうを、大隈重信おおくましげのぶ*らは立憲改進黨りっけんかいしんとうを結成けっせいし、憲法けんぽうの草案そうあんを発表したりして藩閥政府はんぱつせいふを攻撃こうげきした。

(2) 運動のおとろえ…深刻しんこくな不景気ふけいきのなかで、自由党とう急進派はが貧農ひんのうとむすびついて各地かくちで事件じけんをおこすと、運動の激化げきかに不安ふあんを感じてはなれていく人がふえた。政府せいふの弾圧だんあつと懐柔かいじゅうによって運動は分裂ぶんれつし、幹部かんぶも政府せいふに妥協だきょうして運動はしだいにおとろえ、憲法発佈けんぽうはっぷと国会開設かいせつによって幕まくをとじた。

自由党とう急進派はがおこした事件じけんには、最初さいしょの激化事件げきかじけんとなった福島事件ふくしまじけんや秩父事件ちちぶじけんなどがある。

かいたくしかんゆうぶつはらいさげじけん【開拓使官有物払下事件】

1881（明治めいじ 14）年、北海道ほっかいどう開拓使かいたくしがその官有かんゆう物を民間みんかんにはらいさげようとして、世論せろんの反対を受け、とりやめた事件じけん。伊藤博文いとうひろぶみ*らは、この事件じけんは大隈重信おおくましげのぶ*が世論せろんをたきつけたためだとして、大隈おおくまを政府せいふから追放した（明治めいじ 14 年の政変せいへん）。

*じゅうとう【自由党】

(1)自由民権みんけん運動に活躍かつやくした明治初期めいじしょきの政党せいとう。1881（明治めいじ 14）年に国会開設かいせつの詔みことのがでるとすぐ、国会期成同盟きせいどうめいから板垣退助いたがきたいすけを総理そうりとして発足。1884 年、地方の過激派かげきはをおさえきれずに解散かいさん。

(2)1890（明治めいじ 23）年、第 1 回総選挙そうせんきよにそなえて、大井憲太郎おおいけんたろうらが再建さいけんした政党せいとう。総選挙そうせんきよ後立憲りっけん自由党とうとなり、やがて立憲政友りっけんせいゆう会に発展はってんした。

(3)1950（昭和 25）～1955 年にかけての支配的しはいてき保守政党ほしゅせいとう。総裁そうさい吉田茂よしだしげる。1955 年日本民主党みんしゅうとうと合同して自由民主党みんしゅうとうとなる。

(4)1998（平成へいせい 10）年 1 月、小沢一郎おざわいちろうを中心として結成けっせいされた自由主義しゅぎを基調きちょうとした政党せいとう。2003 年 9 月には、民主党みんしゅうとうと合併がっぺいし、新しん「民主党」を結成けっせい。

【福島事件】

1882（明治15）年、福島県令三島通庸と、河野広中らの福島自由党が衝突した事件。▶三島が道路工事に農民を使おうとしたため自由党員の指導する農民らは一揆をおこしたが、約2000人がとらえられ、幹部は国事犯として罪に問われた。

【秩父事件】

1884（明治17）年、埼玉県秩父郡におこった自由党員と農民の決起事件。▶田代栄助を首領として借金すえ置き、雑税軽減などを要求して決起し、高利貸や警察・郡役所を襲撃したが軍隊に鎮圧され、田代ら7人が死刑、ほかに3618人が処罰された。

コーチ 自由党の急進派が貧農とむすびついておこした事件には、他に1882（明治15）年の福島事件が有名。

*うえきえもり【植木枝盛】

（1857～1892）明治めいじ時代前期の政治せいじ家。自由民権みんなけん運動の理論的指導りろんてきしどう者。土佐とさ（高知こうち県）藩士はんしの家の生まれ。板垣退助いたがきたいすけ*らの影響えいきょうを受けて立志社りっししゃに参加さんかして以来いらい、つねに自由民権みんなけん運動主流にあって活躍かつやくし、1879（明治めいじ12）年には『民権みんなけん自由論ろん』をあらわして民権みんなけんが国を強くする基礎きそであるとのべた。また、立志社りっししゃの憲法草案けんぽうそうあんとして『日本国国憲案こっけんあん』を書きあげた。

みんなけんじゆうろん【民権自由論】

1879（明治めいじ12）年、植木枝盛うえきえもりがあらわした民権みんなけん思想の啓蒙けいもう書。人間は生まれながらに基本的人権きほんてきじんけんがあたえられているという天賦人権論てんぷじんけんろんや人民主権論じんみんしゅけんろんなどを一般いっぱんの人々にわかりやすく説とき、民権みんなけん思想の普及ふきゅうに大きな役割やくわりをはたした。

*せいなんせんそう【西南戦争】

1877（明治10）年、鹿児島のかごしまふへいしぞく土族らがかごしませいふ西郷隆盛*をもちたてておこした明治政府に対する反乱。西南の役ともいう。▶そのころ鹿児島では反政府の動きが強かったが、征韓論がやぶれて帰郷した西郷の開いた私学校が、その中心となった。西郷は私学校を中心とする土族におされて拳兵し、熊本城を攻めた。しかし、徴兵令による軍隊である政府軍の反撃を受け、田原坂をはじめ次々と戦いにやぶれ、鹿児島のかごしましろやまたたかさいごさいごうぐんしどうせんしじさつめいじせいふさいだいはんらん鹿島の城山の戦いを最後に西郷軍の指導者は戦死または自殺、明治政府に対する最大の反乱は鎮圧された。

コーチ これ以後、反政府運動は武力を用いない自由民権運動*へとかわっていった。

**さいごうたかもり【西郷隆盛】

(1827～1877)幕末ばくまつ～明治めいじ時代初期しよきの政治せいじ家。維新いしんの三傑さんけつの1人。薩摩藩さつまはん(鹿児島かごしま県)の下級武士ぶしの出身で、通称つうしょうを吉之助きちのすけ。南洲なんしゅうと号した。大久保利通おおくぼとしみち*とともに、薩摩藩さつまはんを公武こうぶ合体(朝廷ちやうていと幕府ばくふとの協力関係きょうりよくかんけい)から倒幕とうばく運動へと動かし、薩長同盟さつちやうどうめいを成立せいりつさせた。ついで、王政復古おうせいふつこのクーデターを指導しどうし、戊辰戦争ぼしんせんそうでは政府軍せいふぐんの総参謀そうさんぼうとして江戸城えどじやうの無血開城むけつかいじやうを実現じつげん。明治新政府めいじしんせいふでは参議さんぎとなり、廃藩置県はいはんちけんでは西郷さいごうのひきいる軍事ぐんじ力がにらみをきかせた。のち征韓論せいかんろんをめぐる争あらそいにやぶれて辞職じしょくし、鹿児島かごしまに帰って私し学校を開き、士族しぞくの子弟を教育した。1877(明治めいじ10)年、かつがれて西南戦争せんそうの首領しりやうとなったが、新政府軍せいふぐんにやぶられて、鹿児島かごしまで自殺じさつした。

すぐれた指導しどう力で明治維新めいじいしんを成功せいこうさせた代表的だいひやうてき人物。

*さかもとりやうま【坂本龍馬】

(1835～1867)幕末ばくまつ期に活躍かつやくした土佐藩とさはん(高知こうち県)の志士しし。江戸えどで剣術けんじゆつを学び、帰藩きはんして武市瑞山たけちずいざんの尊王攘夷そののうじやうい運動に参加さんかしたが、のち藩はんをぬけ出して勝海舟かつかいしゅう*の門人となり、海外事情じじやう・航海術こうかいじゆつを学んだ。その後、勝かつの紹介しょうかいで西郷隆盛さいごうたかもり*をたより、薩摩藩さつまはん(鹿児島かごしま県)の保護ほごを受けて長崎ながさきで海運業を開始。この活動を通じて、敵対関係てきたいかんけいにあった薩摩藩さつまはんと長州藩ちやうしゅうはん(山口やまぐち県)とを接近せつきんさせ、1866年に薩長同盟さつちやうどうめいを成立せいりつさせた。のち、京都きやうとで暗殺あんさつされた。

土佐藩とさはんの後藤象二郎ごとうしやうじらうを動かして、前藩主はんしゆの山内豊信やまうちとよしげ(容堂やうどう)に、大政奉還たいせいほうかんを幕府ばくふへすすめさせた。

<幕末の動乱と明治維新> 第5回～英パークス v s 仏ロッシュ

2017年02月01日 05時20分

組織的攘夷運動の終わり

幕末日本の政局もいよいよ大詰めです。ここで1863(文久3)年に遡って「日本と列強」の動きを振り返ってみましょう。

- 63年 6月 長州藩、下関海峡でアメリカ、フランス、オランダ艦を砲撃
- 7月 アメリカ、フランス艦が長州砲撃
- 9月 朝廷・長州の攘夷派を迫放する「8月18日の政変」
- 11月 尊皇攘夷派の挙兵鎮圧(生野の変)
- 64年 6月 幕府の池田 ^{ちくごのかみ} 筑後守 使節団、パリで横浜鎖港交渉断念
- 7月 池田屋事件(新選組が長州藩などの尊攘派志士を襲撃)
- 8月 長州藩兵、京都に進軍し幕府軍と交戦(^{きんもん} 禁門 の変)
- 長州藩追討の勅命(第1次長州征討)
- 9月 英仏米蘭4国連合艦隊、長州・下関砲台を攻撃し陸戦隊が上陸
- 12月 長州藩、幕府に恭順の意を表す



4か国の艦隊が長州藩に激しい砲撃を浴びせた関門海峡(下関市火の山展望台から)



戦死した奇兵隊の志士たちの霊を弔う碑(下関市の桜山神社で)

この1年半の間、長州や薩摩両藩の「攘夷」に対して、列強各国が武力行使に出ています。これは攘夷行動への「報復」だけでなく、攘夷の不可能なことを「上は ^{みかど} 帝・大君(将軍)から下は武士・浪人に至るまで思い知らしめる」意図があったことは明らかです。

もともと、長州、薩摩両藩は、自国産品の専売制強化や貿易拡大によって財政を再建し、洋式技術も導入して西国雄藩としての地歩を固めてきました。ところが、攘夷戦争では欧米の軍事力に歯が立ちませんでした。これを機に、両藩ともに攘夷論が急速にしぼみ、日本の組織的な攘夷運動は収束に向かうことになります。

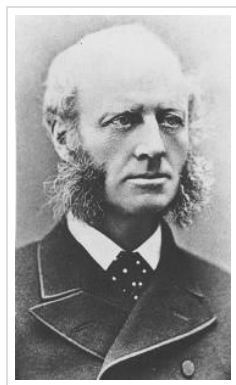
両藩はそれぞれ講和条約を結んだあと、イギリスなど各国に対し積極的な融和策をとり、西洋技術の導入や留学生の派遣に取り組むことになります。

さて、長州藩では65年1月、高杉晋作が、藩庁を握る保守派(門閥派)を打倒するため、奇兵隊など諸隊に決起を促しました。これに伊藤俊輔(のち博文)らが ^は馳せ参じ、正規の藩兵との内戦が始まります。最後は高杉らの急進派(正義派)が勝利し、新体制のリーダーには ^{たかよし}木戸 孝 允 が就きます。

長州藩は4月、新しい政策として、幕府に恭順の意は示しながらも軍備は強化するという「武備恭順」を藩論として決定します。高杉は「大割拠」という言葉を使って、藩の富強化路線をとります。新軍の指導者には村田 ^{ぞうろく} 蔵 六 (大村益次郎) が ^{ばってき} 抜 擢 され、幕府に対抗するために軍備充実を急ぐことになります。

一方、薩英戦争後の薩摩藩では、大久保一蔵(利通)、西郷吉之助(隆盛)、小松 ^{たてわき} 帯 刀 らが藩の主導権を掌握します。

通商条約の勅許



イギリス公使パークス

下関攻撃で攘夷運動に大打撃を与え、賠償金を得たイギリス、フランス、アメリカ、オランダの4か国が65年11月4日、計9隻の連合艦隊を編成し、兵庫沖に来航します。

この「砲艦外交」というべき示威行動の狙いは、通商条約の勅許と、兵庫(神戸)の前倒し開港、関税引き下げの実現にありました。

これに先立つ7月、英上海領事のハリー・スミス・パークス(1828~85年)が、イギリス公使・オールコックの後任として長崎に到着。パークスにとっては、条約勅許と兵庫開港が初仕事になりました。

パークスは20年以上中国に滞在経験をもつチャイナ通でした。広東領事の時にはアロー号事件(第2次アヘン戦争)に遭遇し、占領責任者として中国側と対決。北京で投獄されて死に直面する体験をしています。「人一倍豪毅で、疲れを知らない精励家」というのは、部下だったアーネスト・サトウのパークス評で、まさに百戦錬磨の外交官でした。

このパークスらの要求を受けて問題処理に当たったのが、家^{いえもち}茂と将軍の座をめぐって争って敗れた徳川^{よしのぶ}慶喜^{きんり}でした。当時は禁裏(御所)御守衛総督をつとめていました。

兵庫開港問題で慶喜は、朝廷会議の開催を求め、開港も条約勅許も拒否すれば、京都が攻められ、日本は属国になるかもしれないなどと、脅しも交えて公家たちを説き伏せました。

65年11月22日、孝明天皇が「条約は勅許、開港は不可」との断を下します。攘夷主義者の天皇にしてみれば、足元の兵庫に横浜のような居留地が作られ、英仏の軍隊が駐留する事態だけは避けたかったとみられています。

パークスは、幕府負担となった、長州による下関攻撃の賠償金支払いの延期と、兵庫開港の延期を認める代わりに、関税のルール変更を日本側に認めさせ、条約の不平等を拡大させました。

「一会桑」のパワー

これらの外交問題と並行して起きていたのが、「朝敵」である長州をもう一度懲らしめようとする「第2次長州征討」です。

65年7月、将軍・家茂が征伐に向けて上京・参内しましたが、「長の措置(長州追討)は衆議を遂げて言上せよ」との勅語が伝えられるにとどまりました。多くの藩は、軍費(財政)負担の増大などを嫌って再征に否定的でした。

しかし11月9日、慶喜は、京都守護職・松平^{かたもり}容保(会津藩主)と京都所司代・松平^{しよしだい}定敬^{さだあき}(桑名藩主、容保の実弟)とともに参内して再征を要請、勅許(天皇の許可)を得ます。慶喜はこの

時、「我々、『^{いちかいそう}一会桑』は辞める」と辞職をほのめかしながら、半ば強引に勅許を得たといわれます。

そもそも「一会桑」は、「一橋」(慶喜)、「会津」(容保)、「桑名」(定敬)の頭文字からとったもので

す。文久3年の「8月18日の政変」の後、朝廷首脳部と「参与」諸侯(松平^{しゅんがく}春嶽、伊達

むねなり

宗城、山内容堂、慶喜、容保、島津久光)による合議体制が生まれましたが、ほとんど機能しませんでした。そのあと、「禁門の変」で力をふるった「一会桑」が天皇の信任を得て、朝廷を支配するようになったのです。

この慶喜主導の長州再征勅許に対して、薩摩藩士の大久保利通らが強く反発します。3家老を切腹させて謝罪した長州を追討するのはおかしい、これは「非議(正義でない)の勅命」である、と主張したのです。大久保は再考を求めましたが覆らず、もはや「朝廷これかぎり」と言い放ったといわれます。

薩摩藩は、第1次長州征討では幕府側についていました。それが第2次征討では、「幕府と長州の『私戦』」(西郷隆盛)にすぎないとして、反対に回ります。ここに、幕末政局のライバルとして、とくに「禁門の変」では戦火を交えた薩摩藩と長州藩が、相互接近することになるのです。

幕府内に親仏派



フランス公使ロッシュ

幕末期、アメリカが南北戦争に追いまかれるなかで、アヘン戦争、クリミア戦争を終えたイギリスが、対日外交の主導権をとります。

イギリスとの戦争のあと、親英・開国路線をとった薩摩藩は、特定の開港地の居留地貿易と幕府による独占貿易に強い不満をもっていました。

イギリスの初代公使のオールコックは、幕府との関係は維持しながらも、貿易拡大の主張に耳を傾け、薩摩・長州の開国派との距離を縮めます。

後任のパークスもこれを継承しますが、そのパークスと張り合うことになるのが、64年4月に着任したフランス公使のレオン・ロッシュ(1809～1901年)でした。

ロッシュは、回想録の中で、フランス革命でジロンド派の女王といわれたロラン夫人の娘が自分の「名付け親」で、それが「私の運命に大きな影響」をあたえたと記しています（小島英記著『幕末維新を動かした8人の外国人』（東洋経済新報社）。彼は、30余年にわたって北アフリカやアラブ世界で軍人・外交官を務め、文字通り、型破りな経歴の人物だったようです。

薩摩藩がイギリスに接近したのに対して、幕府側はロッシュを頼りにし、ロッシュもイギリスに協力的だった前任者の方針を転換、独自の立場をとるようになります。この英仏対立の背景には、自由貿易主義のイギリスと、幕府の独占貿易で利潤を上げようとするフランスとの、貿易政策をめぐる対立がありました。

幕府内部には、^{おぐりただまさ}小栗忠順（1827～68年）や^{くりもとじょうん}栗本鋤雲らを中心に親仏派が形成されます。小栗は、幕府の外国奉行、勘定奉行、歩兵奉行、軍艦奉行などを歴任した逸材で、歩兵奉行のとき陸軍部隊を率いて朝廷に開国和親の勅旨を強要するためのクーデター未遂事件を起こしています。

兵制改革や軍備の充実が急務と考えていた小栗は、製鉄所（造船所）の建設に取り組み、64年からロッシュとの交渉にあたりました。フランスの軍港をモデルにした製鉄所建設工事は、のちの横須賀軍港につながります。

幕府のフランス接近は、これにとどまりません。銅製施条カノン砲16門の製造をロッシュに依頼、この大砲は66年の長州再征の直前に届いて幕府側を喜ばせました。

こうして幕府の親仏派は、フランスからの軍事援助をあてにしながら長州藩打倒をはかろうとした形で、勝海舟は「フランスは飢えた狼、イギリスは飢えた虎」とみられる以上、幕仏接近は危険だと警鐘を鳴らしていました。それだけ当時の幕府のフランス依存は、国家独立の観点から危うく見えたのかもしれませんが。

トマス・グラバー



グラバー園内に立つグラバー像(長崎市で)

これに対して長州藩も、幕府との戦争に備えて新兵器を渴望していました。ところが、英仏米蘭の4か国は、長・幕戦にあたっては厳正中立と密貿易の禁止を申し合わせ、長州は武器購入が困難になります。

そこで木戸孝允は、イギリス貿易商のトマス・グラバー(1838~1911年)に相談します。武器の売り込み先がほしいグラバーは、「長州の船で上海へ行って買うなら差し支えない」とアドバイスします。

このとき、長州の窮地を救ったのが薩摩藩でした。長州征討には参加しないことにした薩摩藩は、同藩名義で外国から武器を購入して、これを長州に回すことにしました。土佐藩浪士の坂本りょうまりょうま龍馬が仲介にあたり、長州藩の伊藤博文と井上かおる馨が、長崎で薩摩藩の小松帯刀に要請して決まりました。

グラバーが調達したミネー銃4300ちょう挺、ゲベール銃3000挺が、薩摩の船によって長州に運び込まれました。このほか、汽船も、まず薩摩が購入して長州に譲渡されました。グラバーは井上らに対して「100万ドルぐらいの金はいつでも用立てる」と語ったといわれます。

グラバーは、今も長崎港を眺望できる観光スポット、グラバー邸の主でした。ここでは「グラバーの生涯」を副題とした杉山伸也著『明治維新とイギリス商人』をもとにグラバーについて紹介します。

彼はスコットランド生まれのイギリス人で、59年9月、長崎にやってきました。当時は、日本開港や蒸気船による定期航路の開設によって、対日貿易が活発化し、多数の欧米貿易商が来日。グラバーもその一人でした。貿易商社の下働きから、まもなく独立して「グラバー商会」を設立、茶の輸出や艦船の取引を始めました。

「死の商人」「政治好き」



高台にあるグラバー邸前から見える長崎港(長崎市で)

ちょうど62年、幕府が海防強化の観点から諸藩に外国船の購入を許可し、船の需要が高まる時期でした。同書によると、グラバーが64年から5年間に手がけた艦船の売却は、薩摩・熊本・佐賀・長州藩などのほか幕府相手も含め計24隻、168万ドルにも上りました。

日本の武器・弾薬類の輸入は65年以降、増加しました。中には、戦いが終わったばかりのアメリカの南北戦争(61～65年)で使われた小銃も流れ込んでいました。当然、グラバーも武器・弾薬類を扱っており、薩摩藩名義の長州藩との取引はその代表例です。

その一方、グラバーは65年、幕府から、薩英戦争で威力をみせつけたアームストロング砲計35門の注文を受けるなど、したたかなビジネスを展開していました。このあたりが「死の商人」と称せられるゆえんかもしれません。

ただ、グラバーは懇意の五代友厚ごだいともあつらが進めた薩摩藩留学生の密航について便宜供与をはかったほか、パークスと薩摩との橋渡しもしています。さらに佐賀藩とともに高島炭鉱の開発に乗り出しますが、1870年、商会は資金難から倒産してしまいます。後年、グラバーは、「徳川政府の反逆人の中では、自分がかつとも大きな反逆人だと思った」と語っていますが、この「政治好き」のイギリス商人が幕末政局で果たした役割は無視できないものがありました。

【主な参考・引用文献】

▽佐々木克『幕末史』(ちくま新書)▽井上勝生『幕末・維新』(岩波新書)▽石井孝『明治維新の舞台裏』(岩波新書)▽同『増訂 明治維新の国際的環境』(吉川弘文館)▽小西四郎『日本の歴史19 開国と攘夷』(中公文庫)▽杉山伸也『明治維新とイギリス商人』(岩波新書)▽家近良樹『江戸幕府崩壊』(講談社学術文庫)



筆者の浅海伸夫氏による講座「もう一度学ぶ『昭和時代』」は、次のテーマを「敗戦まで その検証」とし、1月から3月まで計5回にわたり、よみうりカルチャー荻窪(東京都杉並区)で開かれる(途中受講も可能)。読売新聞の連載「昭和時代」の紙面をテキストに「昭和戦争」を振り返る。詳しくはこちら。

<幕末の動乱と明治維新> 第2回～「攘夷」とは何だったのか

2016年11月30日 05時30分 公武合体と皇女和宮



和宮の肖像画

桜田門外の変のあと、徳川幕府は、朝廷(公)と幕府(武)との融和を図るため、公武合体政策をとり、その象徴として孝明天皇の妹である ^{かずのみや}和宮 (1846~77年)と将軍 ^{いえもち}家茂との政略結婚を企てます。

和宮には婚約者がいたのですが、幕府側は再三にわたって「^{こうか}降嫁」を懇請し、孝明天皇の承諾を得るため、最後は「7、8年ないし10年以内」の破約攘夷(通商条約の解消)を誓約しました。しかし、幕府には何の成算もなく、空約束にすぎませんでした。

皇女和宮は1861年11月に京都の御所を出発し、翌62年3月、江戸城で結婚式が行われます。

その1か月ほど前、老中の安藤 ^{のぶまさ}信正が登城途中、坂下門外で、2人の結婚に反対する水戸浪士らの襲撃を受けて負傷しました(坂下門外の変)。

首脳に対するテロによって幕府の力が弱まるのに伴って、外様の長州、薩摩両藩が中央政局に乗り出します。

長州藩は、^{じきめつけ}直目付の ^{うた}長井雅楽が61年、「^{こうかいえんりやくさく}航海遠略策」という独自の開国論を唱えました。幕府と朝廷はわだかまりを捨て、外国の長所を取り入れることで国力をつけ、そのうえで「5大州(5大陸)」を制覇しよう、と主張しました。

次いで薩摩藩が動きます。藩主の父、^{ひさみつ}島津久光(1817~87年)は62年5月、藩兵1000人を率いて京都に到着。公武合体の態勢づくりのため、人事刷新を含む「幕政改革」を朝廷に上奏し、勅使とともに江戸にくだります。



幕末に撮影されたとみられる江戸城(横浜開港史料館蔵)

幕府は勅使らの圧力に押されて、言われるままに徳川^{よしのぶ}慶喜を將軍後見職に、松平春嶽を政事総裁職にそれぞれ任命します。

これまで天皇の權威は、幕府支配を正当化するためのものでした。ところが、幕府の凋落とともに天皇の權威が上昇し、朝廷は政治組織化して「勅命」が絶対的価値をもつようになります。

政治の舞台は江戸から京都に移り、「朝廷」と「徳川幕府」と「外様雄藩」の3者が、複雑に絡みながら政局の主導権争いを展開します。

「尊皇攘夷」の思想

公武合体と並んで進行していたのが尊皇攘夷運動でした。

当時は一般庶民も含めあげて「攘夷」でしたが、それはなぜなのでしょう。

第1は、「開国」による物価の騰貴で＜欧米人に対する怨恨感情＞が芽生えたことです。第2は、欧米商人の中に＜日本人を未開の人種であるかのように軽んじる＞者が少なくなかったためとみられています(中村彰彦『幕末入門』中公文庫)。

日米修好通商条約を調印したハリスでさえも、日本を近代化の遅れた「半開の国」とみて、条約上、対等な扱いをしなかったことが想起されます。

＜尊皇攘夷運動＞を『国史大辞典』(吉川弘文館)で引きますと、こうあります。

＜尊王論も攘夷論も、本来封建的な^{めいぶん}名分思想で、前者は身分制の頂点にある天皇を^{そんすう}尊崇する思想であり、後者は自国を中華とし他国を^{いてき}夷狄として排撃する思想である＞

とくに江戸後期、尊王攘夷の熱風を吹かせたのは水戸藩でした。その^{さきがけ}魁は^{あいざわ}会沢^{せいしさい}正志齋や^{ふじたとうこ}藤田東湖です。



光圀公が着手し、歴代藩主によって完成した「大日本史」

水戸藩では、『大日本史』の編纂^{へんさん}を命じた徳川光圀(1628～1700年)——「黄門」さま——の時代から「尊皇思想」が強く打ち出され、いわゆる「水戸学」が生まれます。

会沢は『大日本史』の編纂に携わり、1824年、イギリスの捕鯨船員が藩領に大挙上陸した際には筆談役をつとめました。会沢が著書『新論』で、対外危機下の国防策や天皇を頂点とする国体論を提示したのは翌25年のことです。

「尊皇」と「攘夷」が一体化する契機は、58年の日米修好通商条約の締結でした。

天皇の希望^くを汲まず勅命をたがえたことは「尊皇」にもとる、通商条約も不平等である、幕府は「破約攘夷」を行動に移さない——これらを背景に「尊皇攘夷」は政治運動のスローガンとなり、やがて、幕府を激しく揺さぶり、幕府を倒壊させるための「口実」と化していくのです。

先に「航海遠略策」を唱えていた長州藩は62年8月、一転して破約攘夷に藩論を統一します。ペリー来航以来、外国への対抗心に燃え、安政の大獄による吉田松陰の処刑に反発を抱く同藩は、攘夷運動の先頭に立ちます。

吹き荒れる攘夷の嵐



生麦事件のあった現場付近(横浜開港史料館蔵)

攘夷運動は、「異人斬り」(外国人殺害事件)を続発させました。

1861年1月、ハリスの通訳を務めていたアメリカ公使館のヒュースケンが、江戸市中で攘夷派の浪士に殺されました。この事件で幕府は、ヒュースケンの母親に対して賠償金1万ドルを支払いました。また7月には水戸浪士らが、イギリス公使館が置かれていた高輪・東禅寺を襲撃し、館員を負傷させました。

1862年9月、有名な「生麦事件」が発生します。

島津久光の行列が横浜の生麦村にさしかかった際、乗馬したまますれ違おうとしたイギリス商人らを薩摩藩士が「無礼討ち」したのです。

イギリス側は犯人の引き渡しや賠償金を幕府と薩摩藩に要求しました。幕府の外交方(外交部)でイギリスの賠償要求の公文書を翻訳していた1人に福沢諭吉がいました。その著『福翁自伝』によりますと、賠償支払いの可否をめぐる事態が切迫し、<江戸市中そりやモウ今に戦争が始まるに違いない>という騒ぎになります。

翌63年1月、長州藩の久坂玄瑞、高杉晋作らが、品川御殿山に建設中のイギリス公使館を焼き打ちしました。

一方、京都では、尊攘派の志士や浪人たちが^{ちょうりょう}跳梁し、公武合体派や開国派の公卿、幕府役人らを相次いで斬殺しました。公武合体で動いた岩倉具視すら「天誅(天に代わって罰するこ^{いんせい}と)」を予告されたため宮中を去り、^{いんせい}隠棲を余儀なくされました。

長州藩や朝廷内の強硬派は、幕府に勅使を派遣して「攘夷断行」を強く要求するに至ります。將軍の家茂も異例の上洛を決意します。上洛は3代將軍・家光以来、229年ぶりのことでした。

63年4月、天皇から「攘夷成功のために尽力せよ」と命じられた家茂は、「攘夷安民」祈願のため^{ずいじゅう}に挙行された天皇の賀茂社行幸に^{ずいじゅう}随従しました。

家茂は、63(文久3)年6月25日を期して「破約攘夷」を約束せざるをえなくなります。幕府は生麦事件の賠償金44万ドルをイギリスに支払うとともに、各国公使に対して条約の解消を通告しました。

この「破約攘夷」をめぐる主張や行動は一様ではありませんでした。

歴史学者の佐々木克氏の『幕末史』(ちくま新書)によりますと、それは<武力対決も辞さないとする強い姿勢で不平等条約の破棄を要求する>強硬論と、<武力対決は避け、あくまで外交交渉で破棄を要求し、全面廃棄は難しいから天皇が望む「横浜鎖港」を実現するよう努力する>穏健論に分かれます。前者は長州や一部の公家が代表し、後者は松平春嶽、山内容堂、島津久光らの立場でした。

下関攘夷戦争と薩英戦争

幕府が攘夷期限としていた6月25日、長州藩はいきなり下関海峡を通過中のアメリカ商船を砲撃します。2週間後にはフランスの軍艦、次いでオランダの軍艦にも砲弾を浴びせました。

これに対して7月16日、アメリカの軍艦ワイオミング号が下関の砲台と長州の軍艦に報復攻撃し、戦闘の末、長州藩所有の3隻を撃沈・大破させます。

当時、アメリカは南北戦争(1861~65年)のさなかでした。リンカンが奴隷解放宣言を出し、ゲティスバーグの戦いで北軍が勝利した時期にあたります。ワイオミングは北軍の軍艦で、南軍の軍艦を捕えるためアジアに来ていました。日本国内の陰悪な情勢を知って駆けつけてきたようです。(古川薫『幕末長州藩の攘夷戦争』(中公新書))

4日後、フランス東洋艦隊の軍艦2隻が報復のためやって来ました。砲弾で長州の砲台を沈黙させると、陸戦隊70人のほか水兵180人が敵前上陸、村落に火を放ちました。

攘夷戦に惨敗した同藩では、藩士の高杉晋作が、外国軍隊迎撃を名目に、民兵組織としての「奇兵隊」編成に着手します。

一方、8月15日、薩摩藩士による生麦事件の報復のため、イギリス軍艦7隻が鹿児島湾に侵入しました。薩摩藩は、イギリス側が求めた殺害者の逮捕と処刑、賠償金の支払いを拒否し、戦闘が始まります。

薩摩側は、イギリスの砲撃で鹿児島の市街地を消失したうえ、全砲台が大破。他方、イギリス側も旗艦の艦長が即死し、死傷者は60人を超えるなど大きな被害が出ます。薩摩藩は講和交渉に入り、幕府から借金して賠償金を支払います。

この戦争は薩摩藩にとって大きな転機になりました。イギリスとの関係を親密化させ「開国」へとかじを切っていくことになるのです。

新選組の近藤勇



新選組の近藤勇、土方歳三らが稽古に励んだ道場があった日野宿本陣(東京都日野市)

薩英戦争の1か月半後、京都では長州藩急進派の暴走を阻止する動きが表面化します。63年9月30日(旧暦文久3年8月18日)、会津藩と薩摩藩の「会薩同盟」(公武合体派)が、朝廷内の急進尊攘派公卿の失脚をはかるクーデターを実行したのです。

薩摩と会津の兵で御所の門をすべて固め、急進派を締め出し、長州藩は門の警衛を解任され追い出されました。

さねとみ

三条 実 美 (1837~91年)ら7人は、「長州藩と結んで天皇の意思とは異なる偽勅を発した」

として長州へと追放されました。「七 ^{しちきょう} 卿 落ち」と言われます。

他方、テロの烈風が吹く63年、幕府の実力部隊として結成された「新選組」が京都守護職の会津藩主・松平容保^{かたもり}（1835～93年）の監督下に入ります。彼らは、袖口が白の「山道つなぎ（キザギザ模様）」で縁取られた羽織姿で京都市中を闊歩^{かつぽ}します。

局長の近藤勇^{いさみ}（1834～68年）は武州多摩郡（現在の東京都調布市）の出身。江戸牛込で天然理心流^{てんねんりしんりゅう}の道場を開いていました。将軍家茂の上洛の警護のため、幕府が浪士を募集した際、師範代の土方歳三、塾頭の沖田総司らとともに参加します。

もともと江戸に拠点があり、将軍家に親近感を抱く〈佐幕攘夷〉の剣客集団・新選組に参集した浪士は剣客ぞろいで、長州藩や勤王の志士らを震えあがらせます。

翌64年7月、近藤らが京都三条の旅館「池田屋」を襲い、尊攘派の志士らを殺傷しました。この池田屋事件は、長州藩を激高させ、幕末史の展開に大きな影響を与えます。この時、長州藩京都

留守居役の桂小五郎^{かつらごろう}（のち木戸孝允^{こういん}）はあやうく難を逃れました。

4国連合艦隊の来襲



連合艦隊によって占拠された砲台（下関市立歴史博物館蔵）

全国各地で尊攘派の反乱が続きます。

63年11月、元福岡藩士の平野国臣らが但馬^{たじま}の生野代官所を襲撃しました（生野の変）。これは、土佐藩士らが和歌山五條の代官所を襲った「天誅組の変」に呼応したものでしたが、たちまち鎮圧されました。また、水戸藩尊攘派の藤田小四郎らが率いる天狗党が64年5月、筑波山で倒幕の挙兵をし、越前まで進軍した末、降伏します。

また、文久3年8月の政変や池田屋事件にいきり立つ長州藩は8月、藩兵を京都に向かわせ、御所に進撃します。しかし会津、桑名、薩摩藩兵と激戦のあげく敗退し、久坂らが戦死しました

きんもん はまぐりごもん
(「禁門の変」または「蛤御門の変」)。

8月24日、朝敵となった「長州征討」(第1次)の勅命がくだり、幕府は諸藩の兵士の出動を命じます。

きびすを接するように9月5日、イギリスをはじめフランス、アメリカ、オランダの4か国、計17隻の連合艦隊が、長州・下関の砲台を攻撃しました。目的は長州による関門海峡封鎖を解除させることでした。イギリス公使・オールコックが他の3か国によびかけました。

このころ、留学のため、イギリスに密航していた長州藩士の伊藤俊輔(のち博文)、井上聞太(のち馨)は、列強による長州藩への武力行使を回避するため、急ぎ帰国し、藩側とイギリス公使館との間に立って避戦工作にあたりましたが、うまくいきませんでした。

敗れた長州藩は9月8日、連合艦隊側と講和交渉を開始します。

藩側の代表は高杉で、伊藤が通訳をつとめました。連合艦隊側の通訳だったアーネスト・サトウ

の『一外交官の見た明治維新』(岩波文庫)によれば、高杉は「悪魔のように^{ごうぜん}傲然として」いました。交渉はオールコックが主導し、賠償金として300万ドルを要求しました。長州藩にはとても払えない法外な額であり、高杉らは頑強に拒みます。結局、オールコックはこれを幕府に押しつけることで、開港交渉で新たなカードを得ようとしていました。

長州藩と薩摩藩による対外戦争は、攘夷派に「刀と^{やり}槍」の時代の終わりと、攘夷が現実には不可能なことを悟らせます。攘夷断行のためにも、積極的に開国することで富国強大化をめざし、そして世界に対峙すべきだという<開国攘夷>の考え方が生まれます。

他方、幕府の長州征伐では、薩摩藩^{そばやく}側役の西郷隆盛が交渉にあたり、長州藩は12月、京都出兵(禁門の変)の責任をとらせて3家老を切腹させます。これにより交戦は避けられました。

【主な参考・引用文献】

▽芳賀徹『明治維新と日本人』(講談社学術文庫)▽中村隆英『明治大正史』(東大出版会)▽松本健一『開国・維新』(中央公論社)▽半藤一利『幕末史』(新潮文庫)▽古川薫『幕末長州藩の攘夷戦争』(中公新書)▽福沢諭吉『福翁自伝』(講談社学術文庫)▽小西四郎『日本の歴史19 開国と攘夷』(中公文庫)▽角川書店編『日本史探訪』(角川文庫)▽高校歴史教科書『詳説日本史』(山川出版社)



筆者の浅海伸夫氏による講座「もう一度学ぶ『昭和時代』」は、次のテーマを「敗戦まで その検証」とし、1月から3月まで計5回にわたり、よみうりカルチャー荻窪(東京都杉並区)で開かれる(途中受講も可能)。読売新聞の連載「昭和時代」の紙面をテキストに「昭和戦争」を振り返る。詳しくはこちら。

＜維新政府、変革の序章＞第9回～廃仏毀釈と「廃城」の跡

2017年08月09日 05時20分

神仏分離令

1868年1月、新政権樹立の際に発せられた「王政復古の大号令」には、「諸事、^{じんむ}神武創業の始めにもとづき」との表現がありました。つまり、「神武天皇の国家創業」への復帰が掲げられたのです。

徳川幕府から権力を奪取した維新政府は、新しい政権の権威と正統性の理念を求めていました。そこで着目したのが、古代天皇の神権的な絶対性でした。

政府は、同年4月5日、国学者や神道家らが建言していた^{じんぎかん}神祇官（701年の

^{たいほうりつりょう}大宝律令で置かれた、神々の^{さいし}祭祀をつかさどる官庁）の再興を布告します。



五榜の高札(埼玉県上尾市教育委員会提供)

同7日には、一般民衆向けの「^{ごぼう こうさつ}五榜の高札」(5枚の立札)で、「^{きりしたんじゃしゅうもん}切支丹邪宗門」を厳禁しました。

さらに4月20日、江戸時代の仏教政策を否定し、神社から仏教色を排除するため、「神仏分離令」を出します。

これらは、いずれも「神道国教化」をめざした措置で、70年2月には、新しい国教を広めるための「大教宣布の詔」が発せられます。

日本の宗教の主流は、1000年以上にわたって「神仏習合」でした。これは、朝鮮や中国などから伝来してきた仏教信仰と、日本固有の神祇信仰とを融合・調和させたものです。

神仏習合が進む中で生まれたのが「本地垂迹説」でした。これは「本地である仏・菩薩が、衆生（生きとし生けるもの）を救うために、日本の神々に姿を変えてこの世に現れた（＝垂迹）」という思想です。例えば、阿弥陀如来の垂迹が八幡神などと説かれました。

この考え方からすると、仏が神よりも尊い存在と位置づけられます。さらに江戸時代、寺が檀徒に対して、キリタンではなく自分の檀家であることを保証した「寺請制度」が、寺院・住職の権限を強めることになりました。

このため、お寺（寺院）とお宮（神社）が隣り合わせで併存している場合は、神社より優位にあった寺院が、その主導権を握りました。神仏分離令は、いわばこの仏と神の地位を逆転させようとしたのです。

政府は全国の神社に対して、僧侶が社務（神社の事務）に従事することを禁止したり、社務に就く場合は全員還俗（僧から俗人に戻る）として、僧位・僧官を返上させたりしました。

仏像破壊のあらし

神仏分離令が出されて以降、日本全国で吹き荒れたのが、廃仏毀釈のあらしでした。「毀釈」とは、釈迦の教えを捨てるという意味です。

廃仏毀釈は、江戸時代の17世紀、会津藩や水戸藩、岡山藩などで小規模ながら行われていましたが、明治初期の廃仏毀釈は、これとは比較にならない大きさと広がりをもっていました。

神仏分離令が出されて数日後、近江（滋賀県）の比叡山山麓にある日吉山王社が武装した一団に襲われました。日吉社は延暦寺の鎮守神でした。

首謀者は神職の樹下茂国^{じゅげしげくに}で、政府の神祇官の事務局に名を連ねていました。樹下は、諸国の神主で作る「神威隊」50人と農民ら数十人を率いて、神域に乱入すると、神体として安置されていた仏像や仏具、^{きょうかん}經卷類を破壊し、焼き捨てました。

樹下ら日吉社の神職は、それまで延暦寺の僧たちの指示に従って勤めてきました。樹下には、積年の恨みがあったようで、仏像の顔を弓矢で射とめて^{かいさい}快哉を叫んだといわれています。



神奈川県鎌倉市「鶴岡八幡宮寺」にあった多宝塔(フェリーチェ・ベアト撮影、1868年、WellcomeLibrary蔵)

各地で廃仏運動は活発化し、京都では、薬師如来の垂迹とされる牛頭天王^{ごずてんのう まつ}を祀る^{まつ}ぎおんしゃ やさか^{やさか}祇園社が、八坂神社と社号を改めさせられました。奈良の興福寺では、春日大社との分離に伴って僧侶が全員還俗し、同大社の神官に転じたため、廃絶の状態になりました。五重塔を250円、三重塔を30円で売却、買い主は金具をとるために焼こうとしましたが、周辺住民の強い反対によって消失を免れました。

鎌倉の鶴岡八幡宮では、仁王門や護摩堂、源実朝^{さねとも}が中国の宗^{そう}から取り寄せたという^{そう}いっさいきょう^{いっさいきょう}一切經を所蔵する輪蔵^{りんぞう}、多宝塔、鐘楼^{たほうとう}、薬師堂^{しょうろう}などが、1870年6月のわずか^{やくしどう}十数日のうちにすべて破却されてしまいました。

このほか、薩摩藩では69年、藩主の菩提寺が廃寺になり、その後、1060の寺院が破却されました。数年間、藩内に一つの寺院も、一人の僧侶も見られなくなっています。富山藩では70年、領内の1635の寺院のうち、6つの寺院が存続を許されたほかは、すべて廃寺とする政策がとられました(『佛教大事典』)。

これに対して、過剰な仏教排撃が政府批判に結びつくことを懸念した維新政府は、71年4月、政府の許可なしに仏像などの排除を禁止するとともに、地方官による寺院の強引な統廃合を制限しました。

寺院の破壊は68～76年ごろまで続いたとされ、破却され廃寺になった寺院数は、当時存在した寺院のほぼ半数に上るといわれています(『日本仏教史辞典』)。

廃仏毀釈により多くの貴重な文化財が失われました。この”暴風雨”については、「国学的な思想が『原理主義化』した例とみることができ、攘夷感情のなかで育まれた『純粋な日本』の復興という情熱が、維新时期社会の興奮のなかで一気に暴発した」(坂本多加雄『明治国家の建設』)といった分析があります。

キリシタン弾圧

政府が「切支丹」を厳禁したのは、開国に伴うキリスト教の浸透を、神道国教化の上からも防ぐ必要があると考えたからです。

徳川幕府も、宣教師やキリスト教信者を迫害してきました。すべての庶民を対象に、踏み絵によって「宗門改め」を実施。17世紀末には、日本からキリスト教徒はほとんど姿を消したとみられていました。

しかし、19世紀半ば、フランスのカトリック宣教師らが琉球・那覇へ布教のために来訪し、1865年には、居留外国人のため長崎に大浦天主堂を建てました。そこを近郊の浦上村に住む隠れキリシタンたちが訪ね、以来、村民たちは公然と信仰を表明するようになります。

九州鎮撫総督兼長崎裁判所総督に着任した政府参与・沢宣嘉は、浦上のキリシタン徹底弾圧の方針を固めます。



- 「浦上四番崩れ」で津和野に流された信徒。帰郷後に撮影(「信仰の礎」より)

浦上では江戸時代、過去3回にわたり「浦上崩れ」と称されたキリシタン検挙事件が起き、長崎奉行所が捕らえた信者の中から獄死者が相次いだ歴史がありました。維新政府は、御前会議で浦上の全キリシタンを流刑に処することを決めます。まず、中心人物の

114人を捕らえて、津和野・萩・福山の3藩に配流し、さらに3384人の老若男女の信徒を、西日本の20藩に流罪としました。流刑中に613人が死亡したといわれます(『国史大辞典』)。

政府の切支丹禁止に続いて、この4回目の「浦上四番崩れ」に対しては、在日外交団から批判の声が沸き上がり、とくに米欧歴訪中の岩倉使節団に対して、訪問先で各国から抗議が寄せられました。このため、政府は73年2月、切支丹禁止の高札を撤去し、キリスト教はようやく活動の自由を得ます。

さらに、仏教側の抵抗・反撃も強まり、「寺請け」制の神社版である「氏子調べ」制も、うまくいかず、1年10か月で廃止されました。廃藩置県後、神祇官は神祇省に格下げされて間もなく廃止されます。神道を唯一の宗教として国民に教化・定着させる政策は行き詰まりました。

一方、政府はこの間、全国の神社を行政管理の下に置き、神職の世襲廃止や神社の社格を定める制度づくりを進めました。

社格とは、神社を神祇官所管の官社と地方官所管の諸社に分け、官社は官幣社(大社・中社・小社・別格官幣社)と国幣社(大社・中社・小社)とし、諸社も序列化しました。

こうして天照大神を祀る伊勢神宮を頂点に、これら多数の神社を国家制度の枠の中に組み入れます。

消えた144城

廃藩置県のあとは、「廃城」の波が押し寄せました。

「文明開化、旧物破壊の思想」が強かった明治初年、「封建遺制の象徴」として、「旧藩士らの反抗運動」の拠点として「障害物視」されたのが、全国各地の城郭でした。当時は、現代と違って城郭を「文化財として保存しようとする考えは少なかった」ようです(森山英一『明治維新・廃城一覽』)。

時代を遡りますと、徳川幕府は大坂夏の陣(1615年)で豊臣氏を滅ぼすと、諸大名に「居城以外の城は破却せよ」と命じました。城郭は一つに限って許すという「一国一城令」は、軍事力の削減を狙いとしており、各地で約400の城が数日のうちに取り壊されたといわれます。

さらに、徳川幕府は武家諸法度を制定し、居城以外に城を新築するのはもとより、無断で修理改築することも禁止しました。

その結果、江戸時代末期には、幕府直轄の江戸城、大坂城、駿府城、二条城、甲府城、

ごりょうかく

五稜郭の6城をはじめ、諸大名の居城など合計180余りの城郭が存在していました。

戊辰戦争は数多くの城を舞台に繰り広げられましたが、火砲の使用は、城郭の防御力の限界を露呈させ、明治維新後に城を取り壊してしまう藩も相次ぎました。

廃藩置県後、城郭は兵部省—陸軍省の管轄となります。



淀城跡

1873年1月、陸軍の6鎮台(軍団)・14営所(兵営)の全国配置が決まり、それらのほとんどが城郭内に置かれました。それに伴い、陸軍が軍用財産として残すものは「存城」、それ以外の、淀城など144城が「廃城」の対象になり、城郭建築は取り壊されることになりました。

各地で城郭の保存・復興計画が進められるようになるのは、大正時代に史跡・国宝保存の法律が制定されてからのことです。

「荒城の月」



滝廉太郎(瀧廉太郎記念館提供)



- 土井晩翠(明治34年頃、仙台文学館提供)



- 岡城跡(大分県竹田市)

こうろう えん さかづき
＜春高樓の 花の宴／めぐる 盃 かげさして／千代の松が枝 わけいでし／むかしの
光 いまいづこ＞

歌曲『荒城の月』は、『花』『箱根八里』『お正月』など、今も愛唱される歌を数多く残した、作曲家・
たきれんたろう
滝 廉 太 郎 (1879～1903年)の作品です。

滝は1894年に東京音楽学校に入学し、ピアノを学びますが、同校が募集した中学教材用の唱歌に自作を応募、当選した曲が『荒城の月』でした。

どいばんすい
作詞者は土井 晩 翠 (1871～1952年)です。『小諸なる古城のほとり』で、同じように滅びゆく古城をよんだ島崎藤村と並び称された大詩人でした。

土井は「『荒城の月』のころ」と題する、以下のような一文を残しています。

＜東京音楽学校から『荒城の月』の歌詞を求められた時、第一に思い出したのが、学生時代に訪れた「会津若松の鶴ヶ城」だった。また、歌詞の3番の『垣に残るは ^{ただ}唯 かづら、松に歌うは唯嵐』は、私の故郷「仙台の青葉城」の実況である。滝君は、この曲を、少年時代を過ごした竹田町(大分県竹田市)に帰省した際、その郊外の「岡の ^{じょうし}城 址」で完成したのであった＞

大分県の南西部、南に阿蘇の山々を望む岡城は、1871年から72年にかけて天守をはじめ建造物は取り壊され、廃城になりました。

滝は、『荒城の月』がおさめられた小曲集『中学唱歌』が発行されて1週間後の1901年4月、ピアノ・作曲研究のため、満3年の予定でドイツに出発します。バッハが大きな足跡を残した「音楽の都」ライプチヒで、メンデルスゾーン(1809～47年)創設の音楽院に合格し、留学生生活を始めました。

しかし、結核に冒された滝は、02年、やむなく帰国。大分市の父母のもとで療養生活を送りますが、03年6月、わずか23年10か月という短い生涯を閉じました。

【主な参考・引用文献】

▽村上重良『天皇制国家と宗教』(講談社学術文庫)▽田中彰『明治維新』(同)▽安丸良夫『神々の明治維新』(岩波新書)▽鎌倉市市史編さん委員会『鎌倉市史 近代通史編』(吉川弘文館)▽今泉淑夫編集『日本仏教史辞典』(同)▽古田紹欽ら監修『佛教大事典』(小学館)▽坂本多加雄『明治国家の建設』中公文庫▽森山英一『明治維新・廃城一覽』(新人物往来社)▽一坂太郎『幕末維新の城』(中公新書)▽小長久子『滝廉太郎』(吉川弘文館)▽土井晩翠ら『日本現代文学全集22』(講談社)▽井上亮『熱風の日本史』(日本経済新聞出版社)

<幕末の動乱と明治維新> 第8回～クーデターで政権樹立

2017年03月15日 05時20分

討幕の密勅



徳川慶喜

徳川慶喜が大政奉還を朝廷に申し出た1867年11月9日、「討幕の密勅」が出されていました。

これは公家の岩倉具^{ともみ}視^{てんりく}らが画策した、「賊臣慶喜」を「殄^{てんりく}戮^{てんりく}」(殺害)せよと命じる詔書です。朝廷の会議も天皇の裁可も得ていない「偽勅」とされています。

天皇側近である議^{ぎそう}奏^{ぎそう}(宮中の業務を統括する職務)の正親町三^{おおぎまちさんじょうさねなる}条^{おおぎまちさんじょうさねなる}実^{おおぎまちさんじょうさねなる}愛^{おおぎまちさんじょうさねなる}から、長州藩の広沢^{さねおみ}真^{さねおみ}臣^{さねおみ}と薩摩藩の大久保利通に手渡されました。京都出兵をためらっていた薩摩藩主と重臣たちに出兵を促す狙いがあったとされます。

朝廷は大政奉還を受けながら、これまで通り、慶喜に「庶政を一切委任」します。慶喜は、19日には征夷大將軍の辞表も提出しました。しかし、混乱をきたした朝廷は、諸侯が上京するまで待つよう指示するだけです。諸侯会議はなかなか開かれず、政権に空白が生じます。

一方、幕府内では「政権返上」の取り消し要求が噴出し、会津・桑名など佐幕諸藩は、薩摩藩への反感を募らせます。

読み誤った薩摩藩

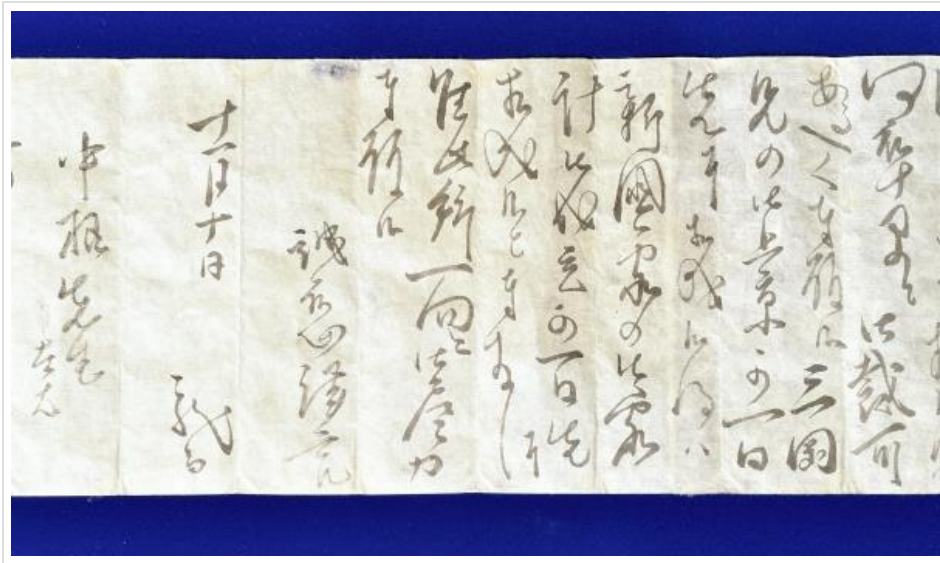
薩摩藩は、慶喜の出方を読み誤りました。

坂本龍馬は、慶喜の大政奉還に「よくも断^{たま}じ^{たま}給^{たま}へるものかな。余は誓って此^{この}公の為に一命を捨てん」(渋沢栄一著『徳川慶喜公伝』東洋文庫)と語ったと伝えられています。慶喜に対する見方が好転し、諸侯会議で指導力を回復する可能性も出てきました。龍馬は、新政府のために八か条からなる「新政府綱領案」をまとめあげます。

ところが12月10日、龍馬は、中岡慎太郎とともに京都河原町の近江屋にいたところを襲撃されて絶命。中岡も2日後に死亡します。龍馬数え年33歳、中岡30歳。犯人たちは「ええじゃないか」の踊りに紛れて逃走しました。

当初は新選組の犯行とみられましたが、京都守護職配下の見^{みまわりぐみ}廻^{みまわりぐみ}組^{みまわりぐみ}の仕業であることがわかりました。明治維新後、新政府に捕まった今井信郎によると、その理由は「伏見において同心3名を銃撃し、逃走した^{もんざい}問^{もんざい}罪^{もんざい}のため」ということでした。

その5日前の龍馬の手紙がつい最近、見つかりました。越前藩重臣の中根雪江に宛てたもので、同藩士・三^{みつおか}岡^{ゆりきみまさ}八^{ゆりきみまさ}郎^{ゆりきみまさ}(由利公正)を新政府の財政担当者として出仕させてほしい、と求める内容です。三岡の上京が1日先になれば「新国家」の財政成立も1日先になってしまう、といった懇請ぶりで、龍馬は新政府に「国内有能の人士」を招くため、力を尽くしていたのです。



暗殺の5日前に書かれた龍馬の手紙

「辞官納地」を命令



「王政復古」(島田墨仙、聖徳記念絵画館所蔵)

逆風にさらされた薩長両藩は、倒幕へ態勢の立て直しを急ぎます。

西郷と大久保は、長州藩の品川弥二郎らと協議し、68年1月2日にクーデターによって政権を転覆させることを決定します。

土佐藩の後藤の抱き込みをはかり、クーデターの手順・段取りを整えます。慶喜はその動きを事前に知らされましたが、反撃に出ようとはしませんでした。

2日夜、岩倉は自邸に薩摩、芸州、土佐、越前、尾張の計5藩の重臣を招き、政変によって新政府を発足させる計画を告げ、協力を求めました。同日深夜の朝議で、長州藩主父子や公家の三

条実美らの官位復活・入京許可、岩倉具視らの^{ちつきよ}蟄居解除などが決まりました。

翌3日午前、西郷隆盛指揮のもと、5藩の兵士が御所のすべての門を固めます。朝廷に復帰を許されたばかりの岩倉が、「王政復古の大号令」案をもって参内します。岩倉は、中山 ^{ただやす}忠能

(明治天皇の外祖父)、正親町三条、中 ^{なかみかどつねゆき}御門経之とともに明治天皇に上奏。天皇は小御所に集まった重臣や公家を前に、王政復古を宣しました。大きな混乱はなく、ここに新政府が樹立されました。

同日夜、小御所で開かれた新政府初の会議では、土佐の山内容堂が、この会議に慶喜を参加させるべきだと主張し、「二三の公卿、幼 ^{ようちゆう}沖の天子を擁し、陰険の拳を行はんとし、全く慶喜の功を没せんとするは何ぞや」と大声で抗議しました。

これに対して、岩倉が「今日の拳は一に皆、聖断に出でざるはなし、何ぞ、その言を慎まざるや」と反 ^{はんぱく}駁。さらに「(慶喜に)反省自責の念があらば、速やかに官位を辞退し、土地人民を還納すべきなのに、「今や政権の空名をのみ奉還し、土地人民の実権は擁し」たままである、と責めたてました(宮内庁編『明治天皇紀(第一)』(吉川弘文館))

会議では、容堂と春嶽のいわゆる公議政体論者と、慶喜追放を譲らない岩倉、大久保の倒幕派が対立しました。休憩に入ると、会議には出ていなかった西郷は、^{ただ}「唯、これあるのみ」と短刀を示し、強行突破の姿勢を示したと言われています。

結局、会議は、慶喜に対し、内大臣の辞職と領地・領民の返還という「辞官納地」を命ずることに決しました。

王政復古の大号令



岩倉具視

「王政復古の大号令」には何が書かれていたのでしょうか。難しい文章ですが、全文を読んでみましょう。

＜徳川内府(内大臣慶喜)、前より御委任せし大政返上、將軍職辞退の両条、今般、断然、聞こしめされ ^{そうろう}候、抑 ^{そもそもきちゆう}癸丑(1853年・嘉永6年の黒船来航)以来、^{みぞう}未曾有の国難、先帝

(孝明天皇) 頻年(毎年)宸襟(天子の心)を悩ませられ候御次第、衆庶(庶民)の知る
ところに候

これにより 叡慮(天子のお考え)を決せられ、王政復古、国威挽回の御基立てさせ
られ候間、自今(今後)、摂関幕府等廃絶、即今(ただいま)先ず仮に総裁、議定、参
与の三職を置かれ、万機(天下の政治)行わせらるべく、諸事、神武創業の始に原づき、
縉紳(公家)、武弁(武家)、堂上(昇殿を許された五位以上の人)、地下(六位以下の
人)の別なく、至当の公議を竭し、天下と休戚(喜びと悲しみ)を同じく遊ばさるべき叡念に付
き、各 勉勵、旧来驕情(おごりおこたる)の汚習を洗い、尽忠報国(忠義を尽くし
国に報いること)の誠をもって奉公致すべく候事>

摂関・幕府の廃絶

このように王政復古の大号令は、まず、慶喜による大政奉還を受け入れたうえで、ペリー来航以
来の「国難」解決のため、摂関も幕府も廃絶すると明言しています。これにより「摂政」「関白」「征
夷大將軍」「議奏」「武家伝奏」(朝廷と幕府の交渉にあたる役職)「国事御用掛」「京都守護職」「京
都所司代」などの官職もすべて廃止されることになりました。

それは、900年以上続いていた摂関制度や、徳川だけでも260年以上にわたる幕府の政治組
織を解体するという、徹底的かつ過激な組織改革でした。

そして新たに「総裁」「議定」「参与」の三職を設置し、ここで「万機」を決するとしました。さらに、朝
廷や幕府以前の「神武創業の始」、つまり天皇統治の原点に戻るとし、ここに新政府の正統性を
求めて、すべてを一新すると強調したのでした。

人事も驚くべきものでした。

総裁には皇族の 有栖川宮 熾仁親王、議定には2人の皇族と、公家の中山、正親町

三条、中御門と、武家の徳川 慶勝(尾張)、松平春嶽(越前)、浅野 茂勲(芸州)、山内容堂

(土佐)、島津 茂久(薩摩)ら計10人が就任。参与には大原 重徳、岩倉具視ら5人の公家が
つきました。参与はのちに西郷、大久保、木戸、後藤らが任命されます。いわゆる佐幕派は、公
家・武家ともに、いっさい排除されていました。

天皇の位置上昇



孝明天皇

幕末政治の流動化は、ペリー来航に始まりました。幕府はこれを「国家の一大事」ととらえて天皇・朝廷に報告して協力を求めました。

幕府は日米修好通商条約の調印でも、事前に朝廷の裁可を得ようと、老中の堀田^{まさよし}正睦を上京させました。本来、天皇から政治・軍事・外交の権限は幕府に委任されているという「大政委任論」に立てば、幕府は自らの責任で決めたあと、朝廷に事後報告すれば済むことでした。

にもかかわらず、幕府が天皇の同意を得る必要があるとして勅許を求めたことは、天皇を政治決定の場に呼び込むことになりました。

63年1月、第14代将軍家茂は、孝明天皇の勅使を上座に迎えて勅書を受領し、これに続いて決行した、第3代家光以来の将軍上洛も、朝廷の権威を高めました。

そして4月に孝明天皇が「攘夷成功」祈願のため賀茂社に行幸した際には、各藩の藩主らが先陣をつとめ、将軍が後陣をつとめました。これまで「近世社会の常識では、天皇・朝廷は、幕府の政治的支配下」にありましたが、この行幸の光景は「天皇は将軍と大名を従えて、日本国家の最上位に位置する存在であることを、無言のうちに誇示」することになったのです（佐々木克『幕末史』ちくま新書）。

これとは別に、天皇・朝廷の権威を高める役割を果たしたのが、日本古来の道を説く「^{こくがく}国学」の^{かもまぶち}賀茂真淵や^{もとりのりなが}本居宣長らの思想でした。また、万世一系の天皇を日本の象徴と位置づける「水戸学」は、「尊皇攘夷」に大きな影響を与えました。

大政奉還や王政復古の政変は、こうした幕府と朝廷の力関係の変化、天皇の位置の上昇という流れの中で起きたのでした。

一方、倒幕派の間で、天皇は隠語で「玉」（ギョクあるいはタマ）と表現されていたそうです。クーデター直前、木戸孝允は手紙に「うまく『玉』をわがほうへだきこむことが、何にもましてもっともたいじなこと」と書いていました。幕末の権力闘争は、まさに天皇の奪い合いであったといえ、それだけ中核に位置する天皇の政治的価値は大きかったといえます。

慶喜、大阪城入り



幕末の大坂城(本丸東側諸櫓、大阪城天守閣提供)

クーデターによっても政局はおさまりませんでした。

慶喜の「辞官納地」に、二条城にいた旧幕府の将兵はいきり立ちます。暴発を恐れた慶喜は、約1万人に上る旗本兵・会津兵・桑名兵らの外出禁止措置をとります。

68年1月初め、慶喜は二条城を去って、大阪城に入ります。

慶喜は大阪でイギリス、フランス、オランダ、アメリカ、プロシア、イタリア6か国の代表と会見し、「政体が定まるまでは、私が責任をもって条約を履行する」旨を述べて、外交権が自らにあることを宣言しました。

こうした動きと並行して、新政府内で議定の松平春嶽、参与の後藤象二郎ら土佐、越前藩などの公議政体派によって、慶喜の処分を見直し、慶喜を議定職に充てるという妥協案がまとまります。加えて、経済的、軍事的に要所である大阪の町に、旧幕府勢が続々と結集してきます。

この公議政体派の逆襲に薩摩・大久保や長州・木戸らは焦りの色を濃くし、徳川幕府打倒の決意を固めます。

そんなとき、江戸で一騒動が持ちあがりました。旧幕府側が1月19日、薩摩藩邸を焼き打ちしたのです。実は、鹿児島藩邸の浪士たちが前年の12月中旬から市中で御用金強盗を働いたり放火

したりと、^{かくらん}攪乱^{ますみつきゅうのすけ} 工作进行を展開していました。西郷が薩摩藩士の^{益満休之助}益満休之助らに指示していたといわれます。

薩摩藩邸焼き打ちは、当時、江戸市中の取り締まりにあっていた庄内藩の^{とんしよ}屯所^{とんしよ}が襲撃されたことに対する報復行動でした。薩摩の挑発に乗ったとも言え、西郷は「これで倒幕の名目がたちもうした」と言ったといわれます。そしてこの薩摩の攪乱戦術は、旧幕府の主戦論を刺激し、憤激した将兵が慶喜を突き上げます。

このころ、慶喜は老中の板倉^{かつきよ}勝静^{かつきよ}を相手にこのようなやりとりをしています。

「徳川の譜代・旗本の中に西郷隆盛や大久保利通に匹敵すべき人材ありや」

慶喜の問いかけに、板倉が「さる人は候わず」と答えると、慶喜は「薩州と開戦すとも、最後には勝てぬ」と言いました。

慶喜には、このまま戦争は避け、新政府の議定の1人になる道もありました。しかし、68年1月25日、慶喜は薩摩藩征討の文書を朝廷に提出します。旧幕府軍の主戦派は隊列を組んで武力上洛へと進みます。

【主な参考・引用文献】

▽坂本多加雄『日本の近代2 明治国家の建設』(中公文庫)▽田中彰『明治維新』(講談社学術文庫)▽井上勝生『幕末・維新』(岩波新書)▽佐々木克『幕末の天皇・明治の天皇』(講談社学術文庫)▽野口武彦『鳥羽伏見の戦い』(中公新書)▽家近良樹『江戸幕府崩壊』(講談社学術文庫)▽笠原英彦『明治天皇』(中公新書)▽司馬遼太郎『最後の将軍』(文春文庫)

＜維新政府、変革の序章＞第6回～戊辰戦争、敗者の側から

2017年06月28日 05時20分

柴五郎の無念



● 柴五郎(国立国会図書館ウェブサイトより)

●

戊辰戦争の敗者には、新政府による処分が待っていました。

69年1月に出された処分で、会津藩主・松平容保^{まつだいらかたもり}は、「死一等を減じ(死罪を免れ)」鳥

取藩に「永預^{ながあずけ}(無期刑)」となる一方、同藩の領地はいったん没収されました。

そして翌70年6月、同藩は青森・下北半島の斗南^{となみ いほう}に移封されます。石高はこれまでの23万石から3万石へと削られました。しかも斗南はやせた土地で、実収は7000石に過ぎなかったようです。

藩士とその家族は、そうとは知らずに移住し、寒さと飢えに苦しむこととなります。その悲惨極まる生活は、『ある明治人の記録—会津人柴五郎の遺書』(石光真人編著、中公新書)によって明らかです。

しばごろう
柴五郎(1859~1945年)は、晩年、戊辰戦争での「薩長の^{ろうぜき}狼藉」に対して、「いまは恨む
にあらず、怒るにあらず、ただ^{くや}口惜しきことかぎりなく、心を^{ごどう}悟道に託すること^{あた}能わざるなり」と、
^{にじ}血涙滲む、この書を残しました。

会津戦争で自刃した祖母と母、姉と妹の遺骨を、^{がれき}瓦礫の中から拾ったという柴は、江戸の捕虜
収容所で生活した後、斗南地方に送られます。それは、柴の言葉を借りれば、「拳藩流罪という史
上かつてなき極刑」というべきものでした。

その後、柴は上京して、^{げぼく}下僕生活の末、「陸軍幼年生徒隊」(幼年学校の前身)の試験に合格し
てチャンスをつかみます。大本営参謀やイギリス・清国公使館付武官などを歴任し、最後は陸軍
大将として台湾軍司令官をつとめました。

兄の一人が、小説『^{かじんのきぐう}佳人之奇遇』を書いた柴四郎(^{とうかいさんし}東海散士)です。この長編は、会津藩
の悲劇を知る日本人青年が、アメリカでアイルランドの独立運動の闘士らと出会って、世界の弱小
民族のために連帯を誓い合う政治小説でした。

政府の東北諸藩に対する処分をみると、仙台は62万5千石から28万石に、長岡は7万4千石
から2万4千石に、庄内は17万石から12万石に、米沢は18万石から14万石に、それぞれ削封
されました。戊辰戦争での抵抗ぶりや降伏時の対応などが^{しんしゃく}斟酌されたようですが、それにし
ても会津処分の過酷さが際立ちます。

一方で、政府は69年7月、鳥羽・伏見の戦い以降の「戦功」を賞します。藩主では、島津久光父
子(薩摩)、毛利敬親父子(長州)に各10万石、山内豊信父子(土佐)に4万石などが支給された
のです。

なお、会津藩主・松平容保は80年2月、日光東照宮の宮司となり、余生を全うします。

「一山百文」と原敬



• 原敬(国立国会図書館ウェブサイトより)

柴の3歳年長に、盛岡(南部)藩の上級武士の家に生まれた^{はらたかし}原 敬 (1856~1921年)がいます。

盛岡藩も戦後、20万石から13万石に削減されました。いったん白石に移され、旧領の盛岡に復帰を果たしますが、政府がその際の条件として要求した70万両が調達できず、廃藩に追い込まれました。

原は、新聞記者から外交官に進んだあと、政界に転じ、1918(大正7)年9月、政友会総裁として日本初の政党内閣を組織します。華族でも、藩閥でもなかったことから「平民宰相」と呼ばれました。東北出身では初の首相でした。

戊辰戦争で「官軍」の薩摩・長州藩は、「朝敵」の東北諸藩を「^{しらかわいほくひとやまひやくもん}白河以北一山百文」とさげすみました。「白河の関(福島県白河市)以北は、一山百文の値打ちしかない」というわけです。

ところが、政界の実力者となった原は、^{はいごう}俳号に、その蔑称の中の言葉である「^{いっさん}一山」を用い、時に「^{とういうじん}東夷迂人(東国の野蛮で、世間の事情にうとい人)」と記すこともありました。



盛岡市の報恩寺山門

原が政権に就く1年前の17年9月、盛岡市の報恩寺で「南部藩戊辰戦争殉難者五十年祭」が開かれました。来賓として出席した原は、次のような祭文を読み上げました。

^{かえり}「顧みるに、^{せきじつ}昔日もまた、今日のごとく国民誰か朝廷に弓を引く者あらんや。戊辰戦役は政見の異同のみ、当時、勝てば官軍、負ければ賊軍との^{ぞくよう}俗謡あり。その真相を語るものなり。今や国民^{せいめい}聖明の沢に浴し、この事実、天下に明らかなり。諸子をもって^{めい}暝すべし。余たまたま郷にあり、この祭典に列する榮を^{にな}荷う。即ち^{せきせい}赤誠を^{ひれき}披瀝して、^{しよし}諸子の霊に告ぐ」

報恩寺は、維新政府から「反逆首謀」者として名指された南部藩家老・^{ならやまさど} 檜山佐渡が切腹に処せられた場所です。原は、祭文を読むのを一度は断りましたが、その日の朝になってにわか起草し、自らの考えを明らかにしました(『原敬日記』)。それは「勝てば正義」として敗者を処断しつつしてきた薩長流の歴史観や、その後の藩閥政治に対する鋭い批判といえました。

次郎長の義侠心

戊辰戦争の戦死者は、新政府軍は3550人、反政府軍は4690人とされています。

反政府軍では、会津藩が2557人と最も多く、次いで仙台藩831人。政府軍では、薩摩藩514人、長州藩427人などとなっています。死者数からみても、会津攻防戦が最大の戦いであったことがわかります。(『明治史要付録表』)

幕府側の死者の中には、「咸臨丸」事件の兵士たちもいました。



咸臨丸は69年から北海道開拓使所属の運送船となり、その後、民間の手にわたり、71年、函館から小樽に向かう途中、座礁し沈没した。その終焉の地、北海道木古内町にある同船のモニュメント

咸臨丸とは、1860年、勝海舟や福沢諭吉を乗せて太平洋を渡った、あの徳川幕府の軍艦にほかなりません。同艦は68年10月、旧幕府の榎本武揚艦隊に加わって箱館に向かう途中、嵐に遭って流され、駿府の清水港への避難を余儀なくされました。

11月初め、政府軍艦が咸臨丸を砲撃し、多数の兵士が死亡し、遺体が港内に遺棄されました。事件直前の7月、駿河藩(70万石、のち静岡藩)に移封されたばかりの徳川家も、微妙な時期だけに、旧家臣らの死体に全く手を出しません。

ここで^{ぎきょうしん} 義侠心を発揮したのが、清水港を支配していた大親分・^{しみずのじろちょう} 清水次郎長(1820~93年)でした。



清水次郎長(国立国会図書館ウェブサイトより)

戊辰戦争では「朝敵」とされた兵士を^{まつ}祀ることは、新政府によって禁じられていたといわれます。しかし、次郎長は、敵兵の死体を海上に遺棄するという「不仁」を正して「仁」を為す——すなわち人道主義の立場から、遺体を無断で収容すると、港外の土中に埋めて吊いました。

思えば、鳥羽・伏見の戦いで敗れた会津藩などの兵士の遺体を葬ったのは、京都の博徒・

あいづのこてつ

会津小鉄でした。また、箱館五稜郭で戦死して棄てられた旧幕府軍の兵士を埋葬し、慰霊

碑を建てたのは、箱館の博徒・柳^{やながわくまきち}川熊吉でした(高橋敏著『清水次郎長』)。

失意のロッシュ

68年6月、一人の外交官が失意のうちに横浜港から帰国しました。フランス公使のロッシュです。

ロッシュは、これに先立つ同年2月、鳥羽・伏見の戦いから江戸城に逃げてきた慶喜を訪ね、「フランスとして助力を惜しまないので再挙をはかってほしい」と求めました。

慶喜は「天皇に対して戦争をするのは、先祖伝来の領地を防衛するのを目的とするだけ」と含みのある発言をしましたが、「退隱」する決意は変わりませんでした。ロッシュが精魂を傾けてきた幕府支援戦略は、ここに破綻しました。



横須賀製鉄所の製鋼所と着船場(1868年、横須賀市市史資料室提供)

しかし、ロッシュが在任中、旧幕府の親仏派とともに取り組んだ横須賀製鉄所の建設やフランス軍事顧問団の^{しょうへい}招聘は、その後の明治の帝国陸海軍の基盤を形成しました。

一方、ロッシュの宿敵だったイギリス公使のパークスは、江戸開城後の同年5月22日、各国に先がけて大阪で信任状を天皇に提出し、新政府を承認しています。

ビクトリア英女王の誕生日にあたって翌23日、大阪に停泊するイギリス艦隊で盛大な祝賀会が開かれました。主賓の日本政府外国事務局督の^{やましなのみやあきら}山階宮晃親王は、「女王陛下の健康のために乾杯」と声をあげ、パークスを大いに喜ばせました。

幕末に展開された英仏両国のつばぜりあいに関連して、ハーバード大学のアンドルー・ゴードン教授は、1860年代半ば、幕府と雄藩との争闘の行方を占う「外交官たちの賭け」は分かれていますと書いています。

そして「イギリスは、表向きは中立の立場をとったが、イギリス外交団の代表は、造反していた外様の諸藩と非公式な関係を維持し、一部のイギリス商人はこれら諸藩を直接支援した。フランスは、西洋の外交・経済秩序への日本の参加プロセスを、自分たちの手で管理することを目指した幕府内の改革派を後押しした。結果は、賭けを分散して抜け目のないギャンブラーぶりを発揮したイギリスに軍配があがった」(『日本の200年 徳川時代から現代まで』森谷文昭訳、みすず書房)と分析しています。

それからの慶喜



• 狩猟姿の徳川慶喜(茨城県立歴史館蔵)

^{よしのぶ}静岡に移住した徳川慶喜(1837~1913年)は、30年近くここで隠居生活を送ります。趣味の狩猟やカメラを楽しみ、豚肉を好んで食べて「豚一様」とあだ名をつけられるなど、ともかく新奇なものを好んだようです。また、2人の女性との間に10男11女をもうけました。

1891年7月23日の読売新聞は、「慶喜公の近状」として「折々は、釣^{つりざお}竿^おを携えて清水港」に遊び、「世事の問題などについては口外せられず、ひたすら閑^{かんじつげつ}日月^{たのし}を娛^{たのし}まるるもの如し」と伝えています。

戊辰戦争から30年の98年3月、慶喜は、かつての江戸城である皇居で、明治天皇に面会します。天皇と皇后は、慶喜を快くもてなしました。

これによって「名誉回復」を果たした慶喜は、東京に移って宮中行事にも出席するようになり、東^{はるのみやよしひと}宮^{みや}明^{あきら}宮^{みや}嘉^か仁^に親王(のちの大正天皇)とも親しくなります。

1902(明治35)年6月、慶喜は、特例として華族に列せられ、公爵にもなって政治的にも復権します。08年には、勲一等旭日大綬章を授与されます。

慶喜は、鳥羽・伏見の戦いで大阪城から遁^{とんそう}走^{そう}したことを「末代までの恥辱なり」(新選組局長・近藤勇)などと批判されました。しかし13年、慶喜が波乱の生涯を閉じた際の読売新聞は、こんなふうに論じています。

「幕末の公の出处進退は、議論なきにあらずといえども、当時よく天下の大勢を達観し、自ら紛糾せる時局の外に、超越してその一身を保つと同時に、一国に対する奉公の道をも^{あやま}過^{あやま}たざりしものなり」

明治維新から半世紀を経て、慶喜は「勤王の志に厚い、模範的大人物」として維新の功労者になっていたのです。そして明治150年を前に、歴史家の間では、明治国家の近代化路線は、薩長政権に先立つ、慶喜の時代に定まったと評価されるようになりました。

【主な参考・引用文献】

▽星亮一『奥羽越列藩同盟—東日本政府樹立の夢』(中公新書)▽家近良樹『その後の慶喜—大正まで生きた将軍』(ちくま文庫)▽佐々木克『戊辰戦争—敗者の明治維新』(中公新書)▽小島英記『幕末維新を動かした8人の外国人』(東洋経済新報社)▽石井孝『増訂 明治維新の国際的環境』(吉川弘文館)▽松浦玲『徳川慶喜—将軍家の明治維新』(中公新書)▽高橋敏『清水次郎長—幕末維新と博徒の世界』(岩波新書)▽伊藤之雄『原敬—外交と政治の理想』上・下(講談社選書メチエ)▽秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』(東京大学出版会)



<維新政府、変革の序章> 第7回~「明治国家」誕生のとき

2017年07月12日 05時20分

藩支配に限界

1869(明治2)年6月に終わった戊辰戦争は、日本社会に何を残したでしょうか。

第1は、巨額の戦費負担によって、各藩の財政を急速に悪化させました。各藩とも、出兵費用や、軍艦・武器・弾薬購入に充てるため、有力商人や外国から多額の借金を重ねました。

第2は、戦乱の被害を受け、軍役にもかり出された農民たちの一揆が、全国的に頻^{ひんぱつ}発しました。北会津地方でも、会津攻防戦終結後の68年11月、農民たちが蜂起して名主らを襲撃する事件が起きています。

つまり、戦争は、藩財政の行き詰まりだけでなく、藩による治安維持でも弱点を露呈させ、藩支配の瓦解を促すことになりました。

こんな「藩解体」を尻目に、維新政府は68年6月、自らへの権力集中を図るため、政府組織の整備に乗り出します。そこで出された「政体書」で、地方は、府・藩・県の三つに区分されました

ふはんけんさんち
(府 藩 県 三 治 体制)。旧幕府などから接收した直轄地に「府」(東京・京都・大阪など)と「県」を設置。そのほかの大名領は旧来の「藩」のままとし、府には「知府事」、藩には「諸侯」、県には「知県事」を置きました。

政府はその後、藩家老の門閥世襲制度をやめさせるなど、藩への介入を強めます。いずれ藩を政府に吸収・統合しようとする狙いのもと、戊辰戦後に打ち出されたのが「版籍奉還」で

す。これは「すべての土地(版)と人民(籍)は天皇の所有である」という「王土王民」思想に基づき、藩主から土地・人民の支配権を天皇に返上させるものでした。

「版籍奉還」を促す



木戸孝允(国立国会図書館ウェブサイトより)

版籍奉還を初めて唱えたのは、薩摩藩士の寺島宗則^{てらしまむねのり}(1832~93年)と、長州藩士の木戸孝允^{たかよし}でした。木戸は、薩摩藩の大久保利通、小松帯刀^{たてわき}らと会談して、版籍奉還で基本合意にこぎつけ、土佐藩、肥前藩もこれに加わります。

69年3月2日、長州、薩摩、肥前、土佐の4藩主が連署して版籍奉還を建白しました。他の全国の藩主たちも、西南雄藩の薩長土肥に遅れまいと、これを追いかけます。

ただ、藩主の多くは、いったん版籍を奉還した後は、天皇から「再交付」のお墨付きをえて、藩主の地位のまま、藩を再建しようと考えていたようです。

というのは、建白書は、「願わくは、朝廷その^{よろしき}宜に処し、その与うべきはこれを与え、その奪うべきはこれを奪い」などと、あたかも所領を再確認するような一文が挿入されていたからです。

木戸は後日、「用術施策」を使ったと告白していますが、結論を先に言うなら、「再交付」はなされず、藩主たちの期待は裏切られます。まるで「捕らぬタヌキの皮算用」に終わった藩主は、「用術」

ならぬ「^{ようじゅつ}妖術」にひっかかったといえるかもしれません。

それでも、版籍奉還はあくまで「公論」で決めようと、諸藩選出の公議人でつくる「公議所」に諮問されたことは、注目に値します。

そこでの議論の中心は、「封建」か「郡県」かでした。封建は、諸侯による分割統治で、郡県は、中央政府が全国に郡県を置く中央集権の制度です。徳川幕府が「封建」とすれば、維新政府がめざすのは「郡県」でした。

公議所の結論は、藩体制維持を前提とした封建・郡県の折衷案でした。

これを受けて同年7月25日、版籍奉還が勅許されます。これにより、274藩主が非世襲の知藩事に任命されました。旧藩主らは、これまでの領有権を否定されたうえで、天皇の土地を管轄する一地方長官になりました。

ただ、藩名は残され、旧藩主は、公家と並ぶ「華族」の称号と、歳入の10分の1にあたる^{かろく}家禄(報酬)が与えられました。また、藩士や旧幕臣は「士族(華族の下、平民の上)」となります。

この直前には、戊辰戦争の軍功に賞典禄・賞金が下賜されており、これが反対を和らげたと言われています。

長岡藩の「米百俵」



小林虎三郎

版籍奉還間もない69年9月、高崎藩(群馬)で年貢減免を求める農民4300人が蜂起します。11月には、凶作に苦しむ新川県(富山)でも大規模な農民反乱が起きるなど、一揆はやむことを知

りませんでした。一方、領地を削られた「朝敵」諸藩や、中小の諸藩は、財政破綻に陥り、自主的に「廃藩」を申し出るところが出てきます。

戊辰戦争で敗北し、小藩に転落した長岡藩もその一つでした。

70年6月、支藩・^{みねやま}三根山藩の士族から、困窮状態にある長岡藩の士族に見舞米100俵が贈られました。その時、長岡藩の士族は、米を分配するよう要求しましたが、大参事・小林とらさぶろう
虎三郎(1828~77年)はこれを退けます。

この逸話は、昭和戦争時の1943年、作家・山本有三が、戯曲化して初演されました。

劇中、虎三郎は藩士たちをこんなふう^にに説得します。(『米百俵』新潮文庫)

「百俵ばかりの米を家中の者たちに分けてみたところで、一軒のもらいぶんは、わずかに二升そこそこだ。一日か二日で食いつぶしてしまう。あとに何が残るのだ。おれは、この百俵の米をもとにして、学校を立て、道場を設けて、子どもを仕立てあげてゆきたいのだ。この百俵は、今でこそただの百俵だが、後年には一万俵になるか、百万俵になるか、はかり知れないものがある。その日暮らしでは、長岡は立ち上がれない。あたらしい日本はうまれな^いぞ」



米百俵の群像(新潟県長岡市)

虎三郎は、佐久間象山の門下で吉田松陰(寅次郎)とともに「両トラ」と並び称された俊才でした。戊辰戦争では河井継之助らを批判して非戦論を唱えていました。

この『米百俵』は2001年、小泉純一郎首相が所信表明演説で取り上げ、広く知られるようになりました。

長岡藩は1870(明治3)年11月、廃藩となり、柏崎県に併合されます。同じく「朝敵」の盛岡藩も、それに先立つ8月に廃藩を選択し、盛岡県になります。このように廃藩置県が実施される前に、自主的に廃藩を申請した藩は13に上りました。

「御親兵」創設



「キヨソネ筆 西郷隆盛肖像画」(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)

版籍奉還後、政府内で兵制改革論議が活発化します。69年10月には、新政府の軍政・軍令の中心にいた兵部大輔・大村益次郎が、京都で長州藩士らに襲撃されて重傷を負い、2か月後に死亡します。兵制改革によって士族の特権がおびやかされることに対して反発した攘夷派浪士たちの犯行でした。

当時は、戊辰戦争に参加した兵士の中で、賞罰の不公平や幹部の不正などに対して憤りの声があがっていました。これに火がついたのが、奇兵隊など長州諸隊の脱退騒動(70年2月)です。隊員の半数に上る約1200人が藩に反旗を翻したといわれています。

かねて「尾大の弊」(尾が大きすぎて自由に動かせない状態のこと。転じて、臣下のパワーが君主の権力を拘束すること)という表現で、兵士らの動きに頭を痛めていた同藩の木戸は、先頭に立って反乱を鎮圧しました。



御親兵の編成(太政類典、国立公文書館)

一方、多数の ^{がいせん} 凱旋兵士を抱えた薩摩藩では、帰郷した西郷隆盛が藩内にとどまったまま、

中央政府の役人の「無定見」な内外政策や ^{ぜいたく} 贅沢な生活ぶりに批判を強めます。加えて同藩が在京の藩兵を引き揚げたため、「薩摩は蜂起するのではないか」といった風聞が流れます。

危機感を抱いた政府は、薩長の提携強化と西郷への説得工作によって事態の沈静化をはかり、西郷もようやく政府入りします。

71年4月、維新政府は、薩摩・長州・土佐3藩の歩兵・砲兵合計1万を親兵として差し出すよう命じました。これは西郷の政策提言を取り入れたもので、この「御親兵」は翌年、「近衛兵」に改称されます。

戊辰戦争では、政府軍といっても、それは薩長両藩など倒幕派の連合軍でした。政府は、親兵によって自前の軍隊をもつと同時に、戊辰戦争で膨らみ過ぎた藩の軍事力をうまく吸い上げることができました。

8月11日、政府は、派閥対立でギクシャクする首脳らの人事を刷新し、木戸孝允を除く参事全員が辞職。薩摩藩大参事の西郷と木戸が参事に就任し、兩人による連立体制が生まれます。

「廃藩置県」を断行



廃藩置県の詔書(太政類典、国立公文書館)

こうした中、維新政府が、クーデター的に断行したのが「廃藩置県」でした。

これは、長州藩の ^{とりおこやた} 鳥尾小矢太と野村靖が、兵部少輔の ^{しょう} 山 ^{やま} 県 ^が 有 ^{あり} 朋 ^{とも} と懇談し、「郡県の治」(廃藩)の実施で一致したのが始まりです。これに井上馨、木戸が同意し、同藩の合意が形成されます。

山県は8月21日、西郷の意見を聞くため、西郷邸を訪ねると、西郷は即座に同意しました。思いもよらぬ西郷の即決ぶりに、山県の方が度肝を抜かれたようです。

27日、木戸、西郷、大久保が会談して、廃藩置県の大綱が決定されます。これを直前に知らされた岩倉具視は、「^{ともみ}狼^{ろうばい} 狽^{さい}」したと言っています。

29日、天皇は、在京56藩知事らを急きよ呼び出し、「今更に藩を廃し県と為す」と、廃藩置県の詔書を出しました。

翌30日、政府首脳の会議で今後の処置を声高に議論していた際、西郷が、「この上、もし各藩にて異議が起こったならば、兵をもって撃ち潰^{つぶ}します」と発言すると、議論はピタリと止まりました。

維新政府が抜き打ち的に廃藩置県を実施したのは、農民一揆の多発や自発的廃藩の動きを背景に、財政が苦しい政府に諸藩の税源を集中させ、その税収を殖産興業や富国強兵に充てる計算がありました。とくに西洋的な軍隊をつくるため、軍制を一元化し国民皆兵を実施するには、廃藩置県はぜひとも必要なことでした。

明治維新「第2の革命」



司馬遼太郎氏

作家の司馬遼太郎氏は、廃藩置県は、「明治維新(王政復古)以上に革命的」と書いています(『「明治」という国家』)。君臨してきた大名が一夜にして消滅し、たくさんの士族が「平等に失業」したからです。

確かに、^た版籍が奉還されて2年経ち、廃藩を望む藩もありました。知藩事に対しては家禄を保証するなど優遇策が採られ、士族も家禄の大幅カットが進みながらも、しばらくの間の生活は保障されていました。

しかし、それにしても、この「政治的破壊作業」が、大名の側に一例の反乱もなく行われたのはなぜなのか。

司馬氏は、幕末以来、米欧による侵略や植民地化に対して「日本人が共有していた危機意識」と、「日本国意識(国家を、破片の藩として見ず、日本国全体を運命共同体としてみる意識)」によるものと言っています。

当時、福井藩のお雇い外国人教師だった、アメリカ人のウィリアム・グリフィスは、廃藩置県の報が同藩に届き、武家の間に激しい興奮が渦巻く中でも、「ちゃんとした武士や有力者は、福井のためでなく、国のために必要なことで、国状の変化と時代の要求だと言っている」と日記に記しています。そして彼らは、「これからの日本は、あなたの国やイギリスのような国々の仲間入りができる」とも言ったそうです。



- 島津久光(国立国会図書館ウェブサイトより)

もちろん、士族反乱や百姓一揆は続きます。しかし、ペリー来航以降、顕在化した幕藩体制の限界や藩の身分秩序の崩壊は、下級武士たちを中心に共通の「時勢認識」を生み出し、これが「第2の明治革命」を成就させたのです。

藩主の中でも、反発が心配されていた薩摩藩知藩事の父、島津久光は、西郷や大久保の専断を非難し、のちのちまで西郷らを悩ませるのですが、この時は「邸中に花火をあげ、噴^{ふんき}気を漏らされたり」と、花火で鬱^{うっぷん}憤を晴らして終わりました。

261を数えていた藩は、廃藩置県によってそのまま県となり、それまでの府県と合わせ3府302県となりました。旧藩主の知藩事は免官され、府県の長官は政府によって新たに任命されます。

ついに徳川の藩体制に終止符が打たれ、中央集権国家としての「明治国家」がここにスタートを切ることになるのです。

【主な参考・引用文献】

▽勝田政治『廃藩置県—近代国家誕生の舞台裏』(角川ソフィア文庫)▽落合弘樹『秩禄処分』(講談社学術文庫)▽松尾正人『廃藩置県—近代統一国家への苦悶』(中公新書)▽升味準之輔『日本政党史論 第一巻』(東京大学出版会)▽福地惇『明治新政権の権力構造』(吉川弘文館)▽三谷博『明治維新を考える』(岩波現代文庫)▽田中彰『明治維新』(岩波ジュニア新書)▽『司馬遼太郎全集54』(文藝春秋)▽グリフィス『明治日本体験記』(山下英一訳、東洋文庫)

Copyright © The Yomiuri Shimbun

<幕末の動乱と明治維新> 第9回～その頃、朝鮮半島では

2017年03月29日 05時20分

李氏朝鮮の時代



14世紀末に倭寇の侵入を防ぐため土の城壁がめぐらされた集落(韓国・順天市で)

日本に攘夷運動が吹き荒れていた1863年、朝鮮では国王が死去し、わずか12歳の^{こうそう}高宗(1852~1919年)が即位しました。^{りし}李氏朝鮮第26代の王です。

李氏朝鮮(李朝)は1392年、^{りせいけい}李成桂(1335~1408年)が高麗を倒して建てた王朝です。

李朝と、当時日本の室町幕府との関係は、^{わこう}倭寇(日本の海賊集団)の禁圧をめぐる交渉で始まり、15世紀初頭には国交が結ばれます。

1419年、朝鮮が、倭寇の本拠地である^{つしま}対馬に遠征軍を派遣して征討に出たため、活発化していた貿易も一時中断されます。

その後、朝鮮は日本との交易のため、^{ふざんほ}富山浦(釜山)など3港を開き、この3港と首都の^{かんじょう}漢城(ソウル)に窓口機関として「^{わかん}倭館」を設置しました。日本からは鉱産物(銅・硫黄・銀)

や染料・香料、工芸品が輸出され、朝鮮からは木綿をはじめ仏具、青磁などが輸入されました。

ところが、1510年、3港の在留日本人が貿易縮小などへの不満から暴動を起こし、日朝貿易は不振に陥ります。



- 韓国・麗水市に立つ将軍・李舜臣の像



1592(文禄元)年、豊臣秀吉が15万余の兵力を動員して朝鮮侵略を開始します。小西行長が率いる第1軍が釜山に上陸したあと、加藤清正らの第2軍、黒田長政らの第3軍が続き、漢城を陥

落させ、^{ピョンヤン}平壤も占領、各地に侵入しました。

これに対して、^{りしゅんしん}李舜臣指揮下の朝鮮水軍や義兵が抵抗をみせ、中国・明軍の支援も受けて劣勢を盛り返し、休戦に持ち込みます。

秀吉は1597(慶長2)年、ふたたび14万余りの軍隊を送りますが、朝鮮・明軍の反撃にあい、秀吉の病死を機に日本軍は撤兵しました。

この「文禄・慶長の役」と呼ばれる朝鮮出兵は、朝鮮の人々に多大の被害をもたらし、日本に対

する^{おんねん}怨恨や警戒心を植え付けるなど、大失敗に終わりました。

朝鮮通信使との交流

徳川幕府は、秀吉のような対外征服は考えませんでした。1607年、17年、24年には、

かいとうけんさつかんし
「回答兼刷還使」と呼ばれる朝鮮からの使節が来日しました。使節の名目は、徳川将軍からの国書に対する「回答」と、文禄・慶長の役の朝鮮人捕虜の帰還でした。

徳川幕府が朝鮮との講和を成立させると、つしま そう
対馬藩主・宗氏が、朝鮮外交の実務と貿易の独占を許されます。

4回目の36年以降、使節は「通信使」と呼ばれ、将軍が代わる時の祝賀が主目的になります。李朝は36年、清軍の侵入を受け、降伏して属国になりますが、清からの圧力に抗するためにも、日本との関係改善をはかる必要があったとも言われています。

使節一行は、釜山から対馬を経て瀬戸内海を東に向かって大坂に入り、京都から東海道を江戸に下りました。コースに当たる諸藩は、約500人にも上る一行をもてなしました。江戸城では使節から国書や進物が献上され、将軍が一行を慰労しました。また、朝鮮使節が、徳川家康をまつた日光東照宮を参詣することもありました。通信使の来日は計9回に及びました。

あめのもりほうしゅう
対馬藩に仕え、対朝鮮外交を長らく担当した儒者に 雨森 芳洲 (1668～1755)がいます。朝鮮語にも中国語にも通じた芳洲は、同藩の「朝鮮方」として最前線に立ち、釜山の倭館(在外公館)に再三滞在して外交折衝にあたる一方、1711年と19年の2度にわたり朝鮮通信使を応接しています。

いずれの来日でも、日朝の学者や文人たちが交歓しあい、日本側は先進的な朝鮮文化を学び、中国の文物にも触れる機会をもちました。19年に来日した通信使のメンバーの1人は、李朝の代

りたいけい
表的朱子学者である 李 退 溪 の著作が、当時の日本でいかにもてはやされていたかを記録に残しています。

通信使は、日朝両国の財政悪化などにより、1811年をもって終わりますが、対馬藩による貿易は継続されます。

大院君の政治



大院君

西洋から遠く離れた日本と朝鮮は、ともに国を閉ざしてきました。しかし、すでにインドを植民地化し、中国の半植民地化を図る欧米列強によって、いよいよ開国を迫られます。

日本が1792年、ロシア使節・ラクスマンから初めて通商を求められたのに対して、朝鮮の場合は1831年、イギリス商船が黄海沿岸に来航したのが、そのさきがけのようです。その後、46年に

はフランス軍艦、54年には日本に再来航したロシアのプチャーチンが、朝鮮半島南端の^{コムンド}巨文島にやってきます。

とくに清国が60年、満州の沿海部をロシアに譲った結果、朝鮮とロシアは国境を接することになり、ロシア側の通商要求が強まります。

こうした中、国王高宗の実父・^{たいいんくん}大院君（1820～98）が摂政として、朝鮮の国防強化をはかります。同時に、王妃の一族などが政権を独占する「^{せいどう}勢道政治」で弱体化した王権を立て直すため、国内改革にも乗り出します。



復元された朝鮮王朝の景福宮の正門(2010年撮影)

大院君は10年間にわたり国政の実権を握り、李朝の王宮として創建され、豊臣秀吉の侵略の際に焼失した「景福宮」を再建します。さらに^{ヤンバン}両班と呼ばれる特権的な支配層の不正をただし、経済的な特権を廃止して税収増をはかりました。

なお、景福宮の正門は韓国併合(1910年)後、朝鮮総督府を建てるため移築され、50年からの朝鮮戦争では木造部分を焼失するなど曲折を経て、2010年、当初の位置に復元されました。

攘夷戦争の勝利

大院君の対外政策をみると、「^{じょうい}攘夷」そのものでした。

キリスト教の布教を警戒した大院君は66年初め、朝鮮に潜入していたフランス人の宣教師9人を殺害し、国内のキリスト教徒を大弾圧します。北京駐在のフランス代理公使は、その知らせを受けると、朝鮮に宣戦を布告。フランス艦隊7隻が陸戦隊を乗せて朝鮮に出動しました。

フランス軍は、宣教師殺害に対する補償や処罰・通商条約の締結を要求して、漢江の河口にある「^{こうかとう}江華島」に上陸。武器や金銀、書籍などを強奪しました。陸戦隊はソウルに侵攻しようとしたが、朝鮮軍の防備と反撃の前に果たせず、撤退しました。

同年7月、大砲を装備したアメリカ商船が大同江をさかのぼって平壤近くまで侵入し、通商を要求しました。その乱暴な態度に憤った群衆によって商船は焼き払われます。また68年、ドイツ商人が、フランス宣教師とアメリカ人らと組んで大院君の父の墓を盗掘しようとして失敗、大院君を怒らせました。

アメリカは71年、5隻の軍艦に大砲を装備して朝鮮遠征艦隊を派遣しました。その上陸部隊は、江華島への水路を北上し砲台を占拠しますが、朝鮮軍は頑強に抵抗し、清国駐在のロー公使による通商条約締結要求も受け入れませんでした。

当時、朝鮮の全国各地には、「洋夷侵犯 非戦則和 主和売国(洋夷侵犯するに、戦いを非とするは ^{すなわち}則ち和なり、和を主とするは売国なり)」と刻んだく ^{せきわひ}斥和碑>が建てられました。

日本を開国させたアメリカも、朝鮮では成功しませんでした。ロー公使は「朝鮮はペリー提督出向前の日本よりも、いっそう厳鎖したる国土である」と、朝鮮の厳しい鎖国攘夷の実情を本国に報告しています。

日朝で対照的な選択

朝鮮の排外主義は、「^{えいせいせきじゃ}衛正斥邪」と呼ばれます。朱子学の解釈に基づいて、「^{まも}正を衛り、^{しりぞ}邪を斥ける」という思想です。

政治学者の佐藤誠三郎・元東大教授は、「近代化への分岐——李朝朝鮮と徳川日本」と題した論考で、西欧列強への対応をめぐる朝鮮と日本の類似性を挙げていました。

それによりますと、日本では「尊皇攘夷」、朝鮮では「衛正斥邪」という名の排外主義は、「自国の道徳的優越性を強調し、世界情勢を戦国時代との類比で理解し、西洋列強にたいしてはげしい敵意と警戒心をいだき、内政改革として人材登用・人心の一致・軍備の強化・経費節減などを主張する点で、きわめてよく似て」いました。

他方、違いもありました。

日本では、中国のアヘン戦争に大きなショックを受けたのに対し、朝鮮は、中国に毎年朝貢使を送りながら関心が希薄でした。1860年の英仏軍による北京占領こそ、さすがに衝撃を受けていますが、それによって採られた政策は排外主義の強化でした。

朝鮮の攘夷戦争は、日本のように「雄藩対列国」ではなく、国家同士の戦争になります。さらに日本は短期間で終戦し、薩摩・長州の雄藩でも、幕府に続いて開国路線が強まります。これに対して、朝鮮は、戦争の勝利によって日本とは対照的な道を選択したのです。

西太后の登場



西太后

さて、アジアの大国・中国に目を転じますと、清を苦しめた第2次アヘン戦争の際、清朝の

咸豊帝^{かんぽうてい}は、北京を脱出して熱河^{ねっか}の離宮に逃げ込みました。

残された弟の恭親王^{きょうしんのう}が、和平交渉にあたりますが、イギリス、フランスの要求を受け入れざるを得ず、屈辱的な北京条約(60年9～10月)を結びました。このため、恭親王は国内から売

国奴を意味する「鬼子^{グイズリュウ}六」の汚名を着せられました。

咸豊帝は61年8月、熱河で病死し、6歳の息子が帝位に就きます。同治帝^{どうちてい}です。

咸豊帝に仕えていた肅順^{しゅくじゆん}の一派が新帝の後見にあたらうとしますが、11月、新帝の生母

である西太后^{せいたいこう}(1835～1908年)と恭親王が協力してクーデターを起こし、政権を掌握しました。肅順一派は追放され、肅順自身は処刑されます。

西太后は満州人エホナラ氏の出身で、27歳の若さでしたが、「垂簾聽政^{すいれんちようせい}」(すだれを垂らして姿を隠し、幼帝にかわって政治を行うこと)によって、国政の中枢に入ります。

内乱の平定や外交は、もっぱら漢人官僚らにゆだね、恭親王を上回る政治的手腕を発揮した西

太后は、以後、甥の光緒帝^{おい こうしよてい}の治世も含めて、半世紀にわたって独裁的にこの国を支配することになります。

清朝の洋務運動

清朝は61年1月、外務省にあたる「^{そうりがもん}總理衙門」を新設します。対外交渉で欺かれないために、との思いを込め、外国語教育や洋書の翻訳などに熱を入れます。さらに「西洋人にならうことは恥ではない」として科学技術の導入が唱えられました。

一方、太平天国鎮圧などで西洋武器の優秀さを知った^{そうこくはん}曾國藩は、西洋の軍事・科学技術に着目しました。曾國藩とともに太平軍と戦った李鴻章は、上海に兵器工場や中国で初めての汽船会社を発足させたり、紡織工場を作ったりします。また、同じく反乱の鎮圧にあたった^{さそうとう}左宗棠は66年7月、福建省に船政局を設立し、軍艦の製造を進めます。

これらの一連の中国の動きは「洋務運動」と言われています。

【主な参考・引用文献】

▽姜在彦『朝鮮近代史』(平凡社ライブラリー)▽金達寿『朝鮮』(岩波新書)▽三谷博ら編『大人のための近現代史 19世紀編』(東京大学出版会)▽上垣外憲一『雨森芳洲—元禄亨保の国際人』(中公新書)▽佐藤誠三郎『「死の跳躍」を越えて 西洋の衝撃と日本』(千倉書房)▽吉澤誠一郎『シリーズ中国近代史1 清朝と近代世界19世紀』(岩波新書)▽加藤徹『西太后—大清帝国最後の光芒』(中公新書)▽三谷博『ペリー来航』(吉川弘文館)▽『国史大辞典』(同)▽高校教科書『詳説日本史B』(山川出版社)▽同『詳説世界史B』(同)

<幕末の動乱と明治維新> 第2回～「攘夷」とは何だったのか

2016年11月30日 05時30分

公武合体と皇女和宮



和宮の肖像画

桜田門外の変のあと、徳川幕府は、朝廷(公)と幕府(武)との融和を図るため、公武合体政策をとり、その象徴として孝明天皇の妹である ^{かずのみや}和宮 (1846~77年)と将軍 ^{いえもち}家茂との政略結婚を企てます。

和宮には婚約者がいたのですが、幕府側は再三にわたって「^{こうか}降嫁」を懇請し、孝明天皇の承諾を得るため、最後は「7、8年ないし10年以内」の破約攘夷(通商条約の解消)を誓約しました。しかし、幕府には何の成算もなく、空約束にすぎませんでした。

皇女和宮は1861年11月に京都の御所を出発し、翌62年3月、江戸城で結婚式が行われます。

その1か月ほど前、老中の安藤 ^{のぶまさ}信正が登城途中、坂下門外で、2人の結婚に反対する水戸浪士らの襲撃を受けて負傷しました(坂下門外の変)。

首脳に対するテロによって幕府の力が弱まるのに伴って、外様の長州、薩摩両藩が中央政局に乗り出します。

長州藩は、^{じきめつけ}直目付の ^{うた}長井雅楽が61年、「^{こうか}航海遠略策」という独自の開国論を唱えました。幕府と朝廷はわだかまりを捨て、外国の長所を取り入れることで国力をつけ、そのうえで「5大州(5大陸)」を制覇しよう、と主張しました。

次いで薩摩藩が動きます。藩主の父、島津 ^{ひさみつ}久光(1817~87年)は62年5月、藩兵1000人を率いて京都に到着。公武合体の態勢づくりのため、人事刷新を含む「幕政改革」を朝廷に上奏し、勅使とともに江戸にくだります。



幕末に撮影されたとみられる江戸城(横浜開港史料館蔵)

幕府は勅使らの圧力に押されて、言われるままに徳川 ^{よしのぶ}慶喜を将軍後見職に、松平春嶽を政事総裁職にそれぞれ任命します。

これまで天皇の権威は、幕府支配を正当化するためのものでした。ところが、幕府の凋落とともに天皇の権威が上昇し、朝廷は政治組織化して「勅命」が絶対的価値をもつようになります。

政治の舞台は江戸から京都に移り、「朝廷」と「徳川幕府」と「外様雄藩」の3者が、複雑に絡みながら政局の主導権争いを展開します。

「尊皇攘夷」の思想

公武合体と並んで進行していたのが尊皇攘夷運動でした。

当時は一般庶民も含めあげて「攘夷」でしたが、それはなぜなのでしょう。

第1は、「開国」による物価の騰貴で＜欧米人に対する怨恨感情＞が芽生えたことです。第2は、欧米商人の中に＜日本人を未開の人種であるかのように軽んじる＞者が少なくなかったためとみられています(中村彰彦『幕末入門』中公文庫)。

日米修好通商条約を調印したハリスでさえも、日本を近代化の遅れた「半開の国」とみて、条約上、対等な扱いをしなかったことが想起されます。

＜尊皇攘夷運動＞を『国史大辞典』(吉川弘文館)で引きますと、こうあります。

＜尊王論も攘夷論も、本来封建的な^{めいぶん}名分思想で、前者は身分制の頂点にある天皇を

^{そんすう}尊崇する思想であり、後者は自国を中華とし他国を^{いてき}夷狄として排撃する思想である＞

とくに江戸後期、尊王攘夷の熱風を吹かせたのは水戸藩でした。その^{さきがけ}魁は^{あいざわ}会沢

^{せいしさい}正志斎や^{ふじたとうこ}藤田東湖です。



光圀公が着手し、歴代藩主によって完成した「大日本史」

水戸藩では、『大日本史』の^{へんさん}編纂を命じた徳川光圀(1628～1700年)——「黄門」さま——の時代から「尊皇思想」が強く打ち出され、いわゆる「水戸学」が生まれます。

会沢は『大日本史』の編纂に携わり、1824年、イギリスの捕鯨船員が藩領に大挙上陸した際には筆談役をつとめました。会沢が著書『新論』で、対外危機下の国防策や天皇を頂点とする国体論を提示したのは翌25年のことです。

「尊皇」と「攘夷」が一体化する契機は、58年の日米修好通商条約の締結でした。

天皇の希望を汲^くまず勅命をたがえたことは「尊皇」にもとる、通商条約も不平等である、幕府は「破約攘夷」を行動に移さない——これらを背景に「尊皇攘夷」は政治運動のスローガンとなり、やがて、幕府を激しく揺さぶり、幕府を倒壊させるための「口実」と化していくのです。

先に「航海遠略策」を唱えていた長州藩は62年8月、一転して破約攘夷に藩論を統一します。ペリー来航以来、外国への対抗心に燃え、安政の大獄による吉田松陰の処刑に反発を抱く同藩は、攘夷運動の先頭に立ちます。

吹き荒れる攘夷の嵐



生麦事件のあった現場付近(横浜開港史料館蔵)

攘夷運動は、「異人斬^きり」(外国人殺害事件)を続発させました。

1861年1月、ハリスの通訳を務めていたアメリカ公使館のヒュースケンが、江戸市中で攘夷派の浪士に殺されました。この事件で幕府は、ヒュースケンの母親に対して賠償金1万ドルを支払いました。また7月には水戸浪士らが、イギリス公使館が置かれていた高輪・東禅寺を襲撃し、館員を負傷させました。

1862年9月、有名な「生麦事件」が発生します。

島津久光の行列が横浜の生麦村にさしかかった際、乗馬したまますれ違おうとしたイギリス商人らを薩摩藩士が「無礼討ち」したのです。

イギリス側は犯人の引き渡しや賠償金を幕府と薩摩藩に要求しました。幕府の外交方(外交部)でイギリスの賠償要求の公文書を翻訳していた1人に福沢諭吉がいました。その著『福翁自伝』によりますと、賠償支払いの可否をめぐる事態が切迫し、<江戸市中そりゃモウ今に戦争が始まるに違いない>という騒ぎになります。

翌63年1月、長州藩の久坂玄瑞、高杉晋作らが、品川御殿山に建設中のイギリス公使館を焼き打ちしました。

一方、京都では、尊攘派の志士や浪人たちが^{ちようりょう}跳梁し、公武合体派や開国派の公卿、幕府役人らを相次いで斬殺しました。公武合体で動いた岩倉具視すら「天誅(天に代わって罰すること)」を予告されたため^{いんせい}宮中を去り、隠棲を余儀なくされました。

長州藩や朝廷内の強硬派は、幕府に勅使を派遣して「攘夷断行」を強く要求するに至ります。將軍の家茂も異例の上洛を決意します。上洛は3代將軍・家光以来、229年ぶりのことでした。

63年4月、天皇から「攘夷成功のために尽力せよ」と命じられた家茂は、「攘夷安民」祈願のため^{ずいじゅう}に挙行された天皇の賀茂社行幸に随従しました。

家茂は、63(文久3)年6月25日を期して「破約攘夷」を約束せざるをえなくなります。幕府は生麦事件の賠償金44万ドルをイギリスに支払うとともに、各国公使に対して条約の解消を通告しました。

この「破約攘夷」をめぐる主張や行動は一様ではありませんでした。

歴史学者の佐々木克氏の『幕末史』(ちくま新書)によりますと、それは<武力対決も辞さないとする強い姿勢で不平等条約の破棄を要求する>強硬論と、<武力対決は避け、あくまで外交交渉で破棄を要求し、全面廃棄は難しいから天皇が望む「横浜鎖港」を実現するよう努力する>穏健論に分かれます。前者は長州や一部の公家が代表し、後者は松平春嶽、山内容堂、島津久光らの立場でした。

下関攘夷戦争と薩英戦争

幕府が攘夷期限としていた6月25日、長州藩はいきなり下関海峡を通過中のアメリカ商船を砲撃します。2週間後にはフランスの軍艦、次いでオランダの軍艦にも砲弾を浴びせました。

これに対して7月16日、アメリカの軍艦ワイオミング号が下関の砲台と長州の軍艦に報復攻撃し、戦闘の末、長州藩所有の3隻を撃沈・大破させます。

当時、アメリカは南北戦争(1861~65年)のさなかでした。リンカンが奴隷解放宣言を出し、ゲティスバーグの戦いで北軍が勝利した時期にあたります。ワイオミングは北軍の軍艦で、南軍の軍艦を捕えるためアジアに来ていました。日本国内の陰悪な情勢を知って駆けつけてきたようです。(古川薫『幕末長州藩の攘夷戦争』(中公新書))

4日後、フランス東洋艦隊の軍艦2隻が報復のためやって来ました。砲弾で長州の砲台を沈黙させると、陸戦隊70人のほか水兵180人が敵前上陸、村落に火を放ちました。

攘夷戦に惨敗した同藩では、藩士の高杉晋作が、外国軍隊迎撃を名目に、民兵組織としての「奇兵隊」編成に着手します。

一方、8月15日、薩摩藩士による生麦事件の報復のため、イギリス軍艦7隻が鹿児島湾に侵入しました。薩摩藩は、イギリス側が求めた殺害者の逮捕と処刑、賠償金の支払いを拒否し、戦闘が始まります。

薩摩側は、イギリスの砲撃で鹿児島市の市街地を消失したうえ、全砲台が大破。他方、イギリス側も旗艦の艦長が即死し、死傷者は60人を超えるなど大きな被害が出ます。薩摩藩は講和交渉に入り、幕府から借金して賠償金を支払います。

この戦争は薩摩藩にとって大きな転機になりました。イギリスとの関係を親密化させ「開国」へとかじを切っていくことになるのです。

新選組の近藤勇



新選組の近藤勇、土方歳三らが稽古に励んだ道場があった日野宿本陣(東京都日野市)

薩英戦争の1か月半後、京都では長州藩急進派の暴走を阻止する動きが表面化します。63年9月30日(旧暦文久3年8月18日)、会津藩と薩摩藩の「会薩同盟」(公武合体派)が、朝廷内の急進尊攘派公卿の失脚をはかるクーデターを実行したのです。

薩摩と会津の兵で御所の門をすべて固め、急進派を締め出し、長州藩は門の警衛を解任され追い出されました。

^{さねとみ}

三条 実 美 (1837~91年)ら7人は、「長州藩と結んで天皇の意思とは異なる偽勅を発した」

として長州へと追放されました。「七 ^{しちきょう} 卿 落ち」と言われます。

他方、テロの烈風が吹く63年、幕府の実力部隊として結成された「新選組」が京都守護職の会

^{かたもり}

津藩主・松平 容 保 (1835~93年)の監督下に入ります。彼らは、袖口が白の「山道つなぎ(キ

ザギザ模様)」で縁取られた羽織姿で京都市中を ^{かっぱ} 闊 歩 します。

^{いさみ}

局長の近藤 勇 (1834~68年)は武州多摩郡(現在の東京都調布市)の出身。江戸牛込で

^{てんねんりしんりゅう}

天 然 理 心 流 の道場を開いていました。将軍家茂の上洛の警護のため、幕府が浪士を募集した際、師範代の土方歳三、塾頭の沖田総司らとともに参加します。

もともと江戸に拠点があり、将軍家に親近感を抱く<佐幕攘夷>の剣客集団・新選組に参集した浪士は剣客ぞろいで、長州藩や勤王の志士らを震えあがらせませす。

翌64年7月、近藤らが京都三条の旅館「池田屋」を襲い、尊攘派の志士らを殺傷しました。この池田屋事件は、長州藩を激高させ、幕末史の展開に大きな影響を与えます。この時、長州藩京都

留守居役の ^{かつらこごろう}桂小五郎(のち木戸 ^{こういん}孝允)はあやうく難を逃れました。

4国連合艦隊の来襲



連合艦隊によって占拠された砲台(下関市立歴史博物館蔵)

全国各地で尊攘派の反乱が続きます。

63年11月、元福岡藩士の平野国臣らが ^{たじま}但馬の生野代官所を襲撃しました(生野の変)。これは、土佐藩士らが和歌山五條の代官所を襲った「天誅組の変」に呼応したものでしたが、たちまち鎮圧されました。また、水戸藩尊攘派の藤田小四郎らが率いる天狗党が64年5月、筑波山で倒幕の挙兵をし、越前まで進軍した末、降伏します。

また、文久3年8月の政変や池田屋事件にいきり立つ長州藩は8月、藩兵を京都に向かわせ、御所に進撃します。しかし会津、桑名、薩摩藩兵と激戦のあげく敗退し、久坂らが戦死しました

^{きんもん}禁門の変または ^{はまぐりごもん}蛤御門の変)。

8月24日、朝敵となった「長州征討」(第1次)の勅命がくだり、幕府は諸藩の兵士の出動を命じます。

きびすを接するように9月5日、イギリスをはじめフランス、アメリカ、オランダの4か国、計17隻の連合艦隊が、長州・下関の砲台を攻撃しました。目的は長州による関門海峡封鎖を解除させることでした。イギリス公使・オールコックが他の3か国によびかけました。

このころ、留学のため、イギリスに密航していた長州藩士の伊藤俊輔(のち博文)、井上聞太(のち馨)は、列強による長州藩への武力行使を回避するため、急ぎ帰国し、藩側とイギリス公使館との間に立って避戦工作にあたりましたが、うまくいきませんでした。

敗れた長州藩は9月8日、連合艦隊側と講和交渉を開始します。

藩側の代表は高杉で、伊藤が通訳をつとめました。連合艦隊側の通訳だったアーネスト・サトウの『一外交官の見た明治維新』(岩波文庫)によれば、高杉は「悪魔のように^{ごうぜん}傲然として」いました。交渉はオールコックが主導し、賠償金として300万ドルを要求しました。長州藩にはとても払えない法外な額であり、高杉らは頑強に拒みます。結局、オールコックはこれを幕府に押しつけることで、開港交渉で新たなカードを得ようとしていました。

長州藩と薩摩藩による対外戦争は、攘夷派に「刀と^{やり}槍」の時代の終わりと、攘夷が現実には不可能なことを悟らせます。攘夷断行のためにも、積極的に開国することで富国強大化をめざし、そして世界に対峙すべきだという<開国攘夷>の考え方が生まれます。

他方、幕府の長州征伐では、薩摩藩^{そばやく}側役の西郷隆盛が交渉にあたり、長州藩は12月、京都出兵(禁門の変)の責任をとらせて3家老を切腹させます。これにより交戦は避けられました。

【主な参考・引用文献】

▽芳賀徹『明治維新と日本人』(講談社学術文庫)▽中村隆英『明治大正史』(東大出版会)▽松本健一『開国・維新』(中央公論社)▽半藤一利『幕末史』(新潮文庫)▽古川薫『幕末長州藩の攘夷戦争』(中公新書)▽福沢諭吉『福翁自伝』(講談社学術文庫)▽小西四郎『日本の歴史19 開国と攘夷』(中公文庫)▽角川書店編『日本史探訪』(角川文庫)▽高校歴史教科書『詳説日本史』(山川出版社)